
小品集 1

酒井 真言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小品集1

【Nコード】

N5205P

【作者名】

酒井 真言

【あらすじ】

夜道を一人歩いて戻る男、曲った分針が三時を指す、一目惚れする中年男性、飲み帰りのOL、力のある皿洗い人、箱に人を詰める男、友人達が突然家に集まる、歌うのが苦手な野球選手、寿司屋の配達をする高校生、機内の二人、絡み合う男女。

小さな作品群。

夜道

膝を抱えて河辺の砂浜に座り、悠悠流れる大河を眺めて考えた。どうしよう、此処で夜明けを待つか？ それとも歩いて宿へ向かうか？ 我が身を傲然と焼きつけた太陽が、色を変えて河面を沈んでしまった。厚く棚引く雲が刻一刻と移りゆく中、小さいエンジン音を広大な景色に響かせて、渡した小舟が対岸のない薄闇の向こうへと戻っていく。ああ、憂愁とはこういう時を言うのだろう。

わたしは立ち上がり、尻を叩いて乾いた砂の上を歩き出した。埋もれるサンダルに砂が入り込み、昼の名残りが感じられる。焼けた砂は次第に熱を冷まし、ひっそりと夜に溶けていくのだろう。夜露が砂を濡らしてしまっだろう。

色のぼけた小舟の脇を抜けて、力強い木々の茂る細い道へ進んだ。もう少し早ければ影絵のように浮くだろうに、すでに木々の輪郭がぼやけて一体となっている。南国の植物から隙間が失せ、密林が濃い。空は深くなる。地面だけがかるうじて色を残している。

ポケットに水一本買うだけの紙幣が潜んでいる。ウエストポーチには夜に向かない本一冊と、数本のジョイントがあるだけだ。物怖じしない友人一人でも隣にいれば、どれだけ心強いだろう。たわいもない会話がどれほどの渴きを満たすだろう。ああ、それでもジョイントがある。不平を漏らすだけの人間を隣にするよりかは、随分と頼りになるだろう。

空が深くなる。無数の星が空を染め始める。萎れたジョイントの先端を歯で切り、火を点けた。熱い煙が肺に染み入る。幾度も繰り返

返されてきた動作が、ぼやけていく風景の中で、はつきりとわたしを感じさせる。

夜は深くなるが、太陽の名残もなかなか強いものだ。森はただの闇に変わり果てたものの、空の端々は染まりきらない。風に冷たさが加わり、湿った肌を乾かしていく。虫の音が訪れゆく夜のしじまに存在感を与える。ああ、静かだ。

河岸に居るのに耐えきれず歩き出したはいいが、宿は途方もなく遠い。それでもじっとしているよりましだ。歩けば誰かに会うかもしれない。もしかしたら、乗り物に乗せてもらえるかもしれない。

早朝から動かし続けている足はとつくにくたびれ、ところどころ筋が痛む。それでも歩みを止めるわけにはいかない。じっと待つなんて、怖くて出来やしない。気を散らせることが出来るなら、這いつくばってでも動く方がましだろう。

背の高い木々が密集して、道の両側を埋め尽くしている。ただ黒いだけの森が壁になって景色を塞ぐ。道はすでに色を失い、かろうじて周囲との境だけが残っている。夜が深くなる。空だけが明るい。月でもあればまだましだろうに。

遠い前方から強烈な光が発光した。車だろうか、バイクだろうか、闇夜の中の光は強烈すぎる。ゆっくりと強さを増して大きくなるにつれて、何時の間にか二つに分かれている。小さかった光が闇夜を裂いて近づいてくる。無遠慮なエンジン音と共に、ヒステリックな速さで膨張する光が、熱にうなされて見る悪夢のように恐怖させる。なんて眩しいんだ。

つんざく音と閃光がわたしの脇を抜ける瞬間、トラックだと気が

ついた。強烈な風が排気ガスと共に吹き抜けると、即死したように眼がまるで見えない。視覚がついていけず眼が痛い。

純然たる闇が再びわたしを包み、幾重の虫の音と、空間を圧迫する密林、煌びやかな星々が戻ってきた。トラックに向かって、手を挙げることも出来なかった。

夜が深まっていく。空より下は漆黒に染まり、森も道も同一してしまった。足元もおぼろげで、眼が機能しているのか疑ってしまう。体の感覚だけが存在の確かを教えてくれるだけだ。ウエストポーチを探り、ジョイントに火を入れた。

頭は重くない。意識はあるが、景色がはつきりしないせいも、夜に溶けてしまったようだ。足の疲れも気にならない。体の感覚も、心同様に希薄になっているようだ。

朝方までに宿にたどり着けるだろうか？ とても無理だろう。それなら歩き続ける意味はあるのか？ ああ、止まっているよりましだ。夜の想像力がわたしを支配して、様々な恐怖を拵えてしまうだろう。歩いて今でさえ、気を許せば一気に陥りかねない。歩みが気分を高揚させて、どうにか持ち堪えている。

ヒッチハイクは出来そうか？ ほとんど車が通らない。通っても先ほどのようでは、気づかれないだろう。それなら、朝方まで歩き続けることができるか？ わからない。ただ今は、それほど苦に感じるどころか、得体の知れない心地好さがある。

ああ、静かだ。まわりには誰もおらず、圧倒的な孤独がある。今日の昼間の記憶も、もはや遠い記憶のようになつかしい。自分が得たいの知れない別人のように思える。しかし悪くはない。寂しさを

突き抜けた、なんとも懐かしい心地好きがある。懐かしい？ いったい何が懐かしいんだ？ どうもおかしいぞ。

深い夜が何か思い出させているのか？ ははは、なにやら変なことを考えている。朝からの疲れ、夜という不可思議な状況、ジョイントの吸いすぎで頭が混乱しているのか？ まあ、この闇夜を一人歩き続ければ、誰だつて一寸はおかしくなるだろう。冷静でなんかいられやしない。

それにしても、何事にも尻込みして勇氣に乏しいこのわたしが、一人見知らぬ異国の夜道を歩けるとは。これだけの気構えがあるなら、生きてきた日常も変わっていただろうに。今考えれば、恐怖を覚えるにしては笑ってしまふ出来事ばかりだ。なんであれほど恐れていたのだろうか？

ああ、夜が深い。死ぬ直前が今のような心持なら、ずいぶん安らかに死んでいけるだろう。道は遠く見えず、周りも黒い壁に囲われている。助けてくれる人はどこにも見当たらず、心を落ち着かせる親しい人の言葉もない。

落ち着かせる言葉？ はははははは、そんなものがなくても、今こうして落ち着いているじゃないか！ 深い闇と満天の夜空が、鳴り止まない虫の音と、肌を触る心地好い風が、確と道を踏みしめる二本の足が、肺を温める渋いジョイントがあるなら！ ああ、今日はなんて美しい夜だろう！

夜は深く、静かにわたしを包んでいる。見えぬ朝は遠く、何度も頭を掠める。

三時（前書き）

分針の曲がった時計が三時を指すと……

三時

あの時計の針は曲がっている。なのに、秒針はスズメバチの尻から突き出た毒針のごとく、今後一切折れ曲がることはなさそうだが。根元は太く、先端は細く、水滴を保つことはとても出来そうにない。針の進みは合っているのだろうか？ わからない。コンマ単位で狂っているのならわかりそうだが、きっかり三秒遅れで動いているとしたら、とてもじゃないが気づきそうにもない。せめて二秒、一秒、十秒？ 時計の針は正確に進んでいるだろう。

あの時計は黒檀だろうか？ それともポリエチレンだろうか？ 時計の針が曲がっている。横つ腹を鉄パイプで思い切りぶつ叩かれたように、赤く熱された鉄パイプで横つ腹を思い切りぶつ叩いたように、気味の悪いほど曲がっている。へこんでいる？ いや、存分に曲がっている。

昔、ある喫茶店に入ったことがある。排気ガスの煙る道路のちよつと目の前にその店があり、二階の窓からは仲良く立ち並ぶ百日紅が見えた。桃色に近い紅色の花がたわわに、たわわに、とてもたわわに、冷房の効いた二階席だった。その店でわたしは古ぼけた置時計を見た。何時を指し示していたか覚えていない。そもそも針が存在していたのかさえ定かではない。

曲がった分針をずるそうに伸ばす時計など、とても信用なんかできるものか。コンマ一秒、二秒、三秒ずれていても、真つ直ぐ張った分針のほうが時計よりも短くても、真つ直ぐに指す分だけ信用におけるだろう。いくら正確に時刻を指し示したとしても、曲がった分針ではたまったものじゃない。

時計が三時を指す。部屋の中央に飾られていた油彩の絵画から、赤の顔料が滲み出し、額縁を派手に汚してしまった。青の顔料は破裂して、フローリングに反吐をぶちまける。黄色は使われていない。転がっていた松脂が忙しく走り出す。琥珀色からはほど遠い角張った松脂が、フローリングの上を分別のない赤ん坊のように暴れる。癩に触ったので思い切り蹴飛ばした。中指が折れてしまう。

扇風機が宙を飛び始める。羽を持っているからとっていい気なものだ。細長い胴を水平にして、蜻蛉気取りかヘリコプター気取りか、悠々と宙を旋回している。それも間抜なことに、電源コードを垂らしいる。やはりこいつも癩にさわる。手元にあった赤い辞書を思い切り扇風機に投げつけた。

突然カバーを外した扇風機の羽に巻き込まれ、辞書はずたずたにされる。ページの切れ端が部屋全体に飛び散り、おもわず目の中に入った。切れ端を急いで取り出すと、“御覧”の意味が書かれている。

扇風機の平に張った尻をつかまえて、そのまま地面めがけて垂直に叩きつけた。しまったことに、丁度真下にはソファアが待ち構えていて、柔らかい弾力に跳ね返されてしまい、そのまま扇風機と一緒に窓から放り出されてしまった。ついつい思い切り力を入れすぎてしまった。

しかしおかしなことに、松脂まで一緒に放り出されている。松脂が何故？ 松脂を叩きつけていないはずだ。たしか、つま先で蹴り上げたような気がする。爪が割れて血が滲んでいるのだから、やはり蹴り上げたのだらう。痛みはないが妙に腹がたつ。あの絵画、赤

い顔料を滲ませたのはあてつけだったのか？

松脂がわたしの踵にへばりつく。得意の粘着性を発揮しているのだらう、コバンザメよりも大胆に付着している。足を振ってみるがぴったり離れない。手を使って剥きたいが、両手は扇風機を掴んでいる。こんな時はライターでも使って、蛭を剥がすように火であぶるのがよいだらう。いや、むしろバーナーで焼き焦がすくらいがちょうど好いかもしれない。踵が焼けてしまうのが難点だが、我慢すれば問題ないだらう。

問題は意気揚々と空を飛んでいる扇風機だ。この小さな扇風機にこれだけの力があると、誰が予想できるだらう。見れば、開発者だって涙を流して驚かすにはいられないだらう。

以前、動画サイトにラジコンヘリコプターを操る者が投稿されていた。その人物は自然界では有り得ないほどの神がかった動きで、奇怪なヘリコプターを操縦していた。この扇風機も似たようなものだ。弱・中・強のスイッチをはるかに超えた、最強とでもいうべきスイッチが押されたように、指を突っ込む者を容赦なくスライスするほど、羽は凄まじい速度で回転している。風ではなく、火でも噴きそつな勢いだ。

気がつけばはるか上空にいる。インターネットサイトの航空写真地図を生で見えるように、下界がはるか下方に見える。やはり生で見ると爽快だ。それにしても、扇風機の分際でどこまでわたしを運ぶのだらう。しかしよく見てみると、電源コードはとっくにコンセントを離れている。

すると羽の回転が止んでしまった。重力に引っ張られたわたしと扇風機、それと松脂は、地上めがけて落下を始めた。

どうしてこうなったのだろう？ このまま扇風機が目を覚まさなければ、わたしは地上に潰れて死んでしまう。松脂などなんの期待も持てない。大変深刻な状況に陥っている。

これも全部、あの時計の針が曲がっているからだ！

一目惚れ(前書き)

休日、中年の派遣労働者が、梅雨の晴れ間に誘われて箱根の紫陽花を見に行くと……。

一目惚れ

一目惚れなんざ、四十五年間かろうじて生きてきた中で、一度だつてお目にかかったことない。

たしか中学生の時だったか、やけに鼻の高いバトミントン部の男、そつだ、前田という喋るだけしか能のない奴が、練習試合で見かけた女の子に一目惚れしたと、やけに自慢げに話していたな。なんて説明していたか忘れたが、一足先に人生の醍醐味を体験した事を、同情求めながら誇るように、恋する辛さを身勝手に話し続ける。気味悪いほど女性の事を褒めちぎるその態度が、やたら気に入らなかつた事だけは覚えている。

そつだ、おれだつてその当時はすでに好きな子がいて、誰にも気づかれずに、さりげなく相手の動きを知ろうとたくらんでいた。毎晩寝る時思い浮かべて、枕を強く股間に抱きしめることを、ははは、こんな中年が思い出すには、べつとり脂汗をかいちまう。淡い思い出どころか、夢にも描けなかつた今の現実を突きつけるだけの、腐つた塩辛ぐらいのものか。

前田の一目惚れが最初で最後、半端なやんちゃを振りかざして、世間下目に歳を重ねりゃ、気づいた時はすでに深みの中、商売回す頭もなきや、人にぶら下がる要領もない。漢字検定ほどの価値もない、立派な自分だけの信念だつて、他人の得にならなきや何にもならず、職を得る邪魔ばかりしやがる。変えようつたつて、とつくに固まつちまつて言うこと利かねえ。

一目惚れなんぞに縁がない。好きになつた女は皆、気がつきゃ好

いていたような曖昧な女ばかりだ。心底愛した女も何人がいたが、ああ、高校に入った頃から、心底恋することなんてなかったな、そういえば。

まったく、とんだ事になっちまった。梅雨の半ばの晴れ間が好く、派遣の仕事がないっていうから、ついつい渋沢松田間の景色を眺め、ついでに箱根駅の紫陽花でも見ようかと、柄にもない呑気な休みを考えちまった。こいつは全部陽気のせいだ。

ちよつと思い出しても、あの、得体の知れない、苦笑いばかり浮かばせる、むず痒い胸奥の火照りが焚きつけられる。人生の半分ぐらい生きていれば、普段味わうことのない珍しい感情も、そりや多く知っている。精根尽くして築き上げた会社が倒産した時、それに合わせて婚約済みの女が隠れた時、赤灯が蟻のように周りに群がった時、おふくろが亡くなった時、いや、もつと嬉しい時もあった。

しかしこいつは今まで味わったことのない感情だ。小さい頃の、女に恋した時に似ているようで、まったく質が違う。歳を重ねて擦れちまったせいじゃないな、こいつは完全に別物だ。交通事故に遭うようだとは、何かで聞いた事あったが、まさしく事故の衝撃と同じ、唐突に襲われる重圧、一瞬で世界の裏側へ移動する頭の混乱、時間が経つごとに痛みが増してくるこの浸透、交通事故そのものなんだよ。

あの子はどの駅から乗って来たんだっけ？ 相模大野の時点ではいなかったよな、やっぱり海老名か厚木だったはずだ。視界の脇に薄いピンクと黒、なにより白くて細い脚が光って目についた。確かめようと目を追えば、乗客に紛れ、隙間を動く色のみ覗けるだけで、すぐに巨大な腹の裏に消えちまった。

まったくでかい腹だったよな！ どうしてああいう中年のおばさんは、ああも図々しく、太鼓と呼ぶには立派過ぎる腹を、でかでかとおれの顔の前に据えるんだ？ 乗客が目の前に座っているんだから、少しは気を使って、間隔を開けて吊り革を握ればいいのによ。白いＴシャツを透ける醜い腹が、興味をそそる色を飲み込んだ。まさに巨大な卵のような腹だった。車窓の景色も何もあつたもんじゃない。

視界を埋める垂れたでかつ腹が、伊勢原停まった電車にころころ転がりや、驚いたことに、同じ女とは思えない艶な姿が向かいの席に！

しゃんと揃った櫛の前髪、後ろに結った髪が引き締める、玉と言う他ない丸顔、これまた細い首、風に散りそうなピンクのカットソーに、骨に沿って張られる淡い皮膚、膨らみのおだやかな胸、自信を示す短い漆黒のスカート、慎まやかに両手を添えて、腿と腿を挟んだ奥をばやかせ、細い脚をほどよく寝かす。

おせちを見るようだと言っちゃ、なんだか仰々しいが、見るも喜ばしい豪華な料理を目の当たりにするんだから、やはりおせちのようだ。繊細に透きとおる体の部位に、控えめで小さな個々の形だ、ゆかしいところが安っぽくない。それでいて、脚には恐ろしい色気を含んでいる。

そんな女の子が、瞳を閉じてすやすやと眠っているんだ。背筋を曲げず、首も傾げず、立場をわきまえた振る舞いで寝入っている。おれが中年の卑しいおやじだからじゃない、あれを見れば、性も歳も関係なく、惚れ惚れと見ない奴がいるか！ そうだ、あの子は瞳を閉じて、紫陽花染まった上瞼をさらし、鑑賞として存在していたんだ。対峙しているのとはばかりたくなる、おれの卑小さを圧迫す

る美しさが、威嚇も警戒もすることなく、静としてじっとしていたんだ。おれの四十五年間で、一度だって個人的な関係を許さない、圧倒的な位の人間が！

そんな強い存在に、いくらおれだって最初はどぎまぎした。眼がつぶれるほど見とれていたくつたつて、あまりに美しいもんだから、なんだか罪悪感というか、妙に落ち着かなくてよ、真正面にいる女の子から目をそらして、平凡極まる男子学生の後ろの風景に視点を定めて、盗むように女の子を見た。しようがねえ、何も持たないしがない男だ、夢も虚勢も中途半端な弱い中年だ。

けどよ、電車に乗っていて、正面にいる人を見るのは普通だろ？ 見たいものが正面にあるのに、わざわざ見たくねえもんを見て、不自然に前を見るほうが変だろ？ 第一、おれの隣に座っているおっさんなんか、スポーツ新聞を広げながら、いくらだつて字なんか見てねえんだ、それに比べりゃ、おれが正面を見続けるのもおかしくないだろ。いつもは真正面を向いて座っているんだしな。

それからだな、機会を逃さないように意気込み、周りの目も気にしないで、まじまじと女の子を觀賞し続けたのは。見れるものは、見れる時に見とくべきだもん。女の子がちょっとした拍子に眼を覚ませば、絵を見るように、細かい所まで見ることなんか出来やしない。次の駅で降りでもしたら、視界の脇に入れることさえ出来ない。悔しがること間違い無しだ。

ほんとむずむずする時間だったな。触れるだけで融けそうな女の子、傍に寄るだけで気が違いそうな女の子、あんな子を視界に独り占めにして、血管の伝う筋、微細な皮膚の紋様、浮かぶ質感まで覗けた。おやじがこんな事をすりゃただの変態か、いや、絵に走らされたタッチ、細かい技法、眼を凝らさなきゃ気づけない、小さな色

を見る鑑賞者のようなもんだ。美しいものを見よつとする姿勢は、ちつとも変わりやしない。

中でも股間の隙間、梅雨に似合わぬ春の香りをまとう姿態の中で、唯一暗い影を落として、華やかさを妖艶にまどろむスカートが、薄い布地に凜として、一切の無駄なく腰まわりを隠す。あれは見事だった。すこしのずれでもあれば、股間の膨らみに光が当たる。中年のおれなんか、ただの助平で片付けられちまう。

しかし期待しないわけにはいかない！ 偉そうに女性を褒め讃えておきながら、やはりおれは若い股間が好きな中年男性なんだ。見たくないなんて思いもしない、むしろ見せるだ。美に取りつかれた芸術家どころか、わずかな金にすがりつくごろつきだ。花より団子に騒ぎ、進んでわかめ酒、いやいや濁っちまう。

そんなだから、秦野に近づく頃には、隙間ばかりに集中しちまった。時折全体を眺めて、女の子の美を確認してから、可憐な美を単なる性欲の対象に下げる、股の色が表れるのを待った。こうなると中年の卑しさ、見初めの軽い遠慮などとうに失せ、面の厚い欲に正直になっちまう。恥じらいなんざ上辺だけのもだ、すぐに手の平を裏返しちまう。

それでも相手は洗練された美の存在だ。どうせ、幼稚園にならないくらいから自分の優等に気づき、磨いて、ぼろを出さないことに励んできたんだろう。その証拠が、いくら寝ていようと乱れない、練りこまれた上半身の姿勢と、見えそうで見えない脚の位置だ。おれならすぐに、秘部をあからさまに晒しちまいそうだ。とてもあんな姿勢を保っていらねえ。

それでも万が一にへまするかもしれないと、渋沢松田間の景色に

目もくれず、ただ股間の影一点に眼を凝らした。次の駅が近づくと、降りはいないかとひやひやしたが、降りる際に色を晒すかもしれないと、気を抜くこともなかったな。男の助平根性には自分でも驚いちまう。

それでも隙を見せない艶な女の子、静かに眠るその裏で、卑小な男のあせりをほくそ笑んでいるのかと、思うこともちらほらあった。

さすがに足柄を過ぎて、小田原が近づいたと知ると、見れない事の悔しさがいよいよ募り、残り少ない機会を逃さぬよう、心を引き締めにかかったその途端だ。なんの前触れなく、彫像のような体が動いて、その、若い紫陽花臉に包まれていた瞳が開かれた。

なんて大きな白眼が存在するんだ！ 黒が小さいわけじゃない、眼のキャンパスが広すぎるだけ。おれはつくづく思い知らされた。どんなに体が優れていようと、結局人を決めるのは眼だ。彫像なら眼がなくとも、腕が欠けても、美しく居られるかもしれない。しかし生きた人間を決めるのは、その眼に拠るところが大きい、いや、すべてと言つてもいいだろ。どんなに出来ない部位も、魔法のような眼の力に活かされちまうのに、見ごたえある可憐な体とくりゃ、そりゃあとんでもねえ。

眠っていたのが嘘のように、寝ぼけた瞳をしていない。なんだ？ 汚いおっさんを一秒だって見ないよう、ただじつと眼を閉じてやり過ごしていたのか？ 自身の美を見せつけ、同情として眼の保養を許したのか？ それとも気ままな悪戯か？

怯えちまった。おれの乏しい想像ではとても描かれない、強烈な命を持った瞳に射られ、ただ衝撃に震えるだけだ。吸い寄せられながらも、咎められるようで、とてもまともに見られない。悲しい中

年の習性か。

車窓の風景だけ明るく移る、人もまばらな、心地良い、昼に近づく小田急線が、こつも劇的に世界を変えらるゝ。たった一人の女の子が、その瞳を開かせるだけで。

至福の終わりを告げるよう、電車は優しく速度を落とし、小田原駅に着いた。それでもおれは立派な男だ、二度と見れない機会を捉えるため、勇気を絞って股間の誘いに視線を集中させた。いくら心がざわついて、口から湯気が出ようとも、本能だけは忘れない。他人に助平と思われ、女の子に寒気を覚えられても、これだけは譲れない。見るは一時の恥だ。

しかし手練な女の子、わずかにずらした脚に期待させるも、肝心な部分は晒さずに、すつくと立ってホームに降りてしまう。

なんて優雅なんだ！ おれの見る間、わずかな隙をたったの一度も作らず、性に汚れぬ際を保ち、その艶姿を卑猥に落すことなく、プラトニックな小僧でも讃歌しそうな、完全なる美の形跡を残した。なんであんな女の子が、この時間の、こんな小田急線にいるんだ？

強烈な余韻に陶醉して、もっと味わいたいと、我を忘れて後ろ姿を追いかけた。さすが手落ちのない女の子、歩く姿にも芯が入り、ホームの階段上るも手抜かりない。

上りきると、凡俗な人の群れの中、たった一人魅惑な存在を誇示しながら、足早に改札を抜けて行くのが見えた。見失っちゃたまんねえ、人の群れを追い越して改札に近づき、女の子の姿を追いつつキップを入ると、ああ！ 入場券か！ 間の抜けた機械音と、容赦のない扉に行く手を阻まれちゃった。

なんて情けねえ。駅を出る金が勿体ないとけちって入場券を買い、それだけの金しか持つてこないから、こんな羽目になっちまった。いわば日頃のおれが、女の子との接点を失わせたようなもんだ。定職も持てずに、派遣の肉体労働でどうにか食いつなぎ、酒には金を払うが、それ以外にはとんと払わねえ。そんなけちつたれな性格、いや、そうさせる今の生活が、女の子を、はあ……。

なんだか魂抜かれて、骨抜きにされちまった。首筋のむず痒い青い感情が沸き立ち、鼓動を焚きつける。胸から腹にかけての空洞が、次第に形を表して伸縮する。おれはあんな女の子を見たことねえ、いや、あつたとしても、あんな瞳を生で拝んだことはない。

はあ、夢とも思う生々しい記憶は頭を巡り、静と湛える婀娜な様から、いくらだつて痛みは募ってくる。おれだつて恋は知っているさ、しかしこんなに血を沸騰させる代物は、とんとお目にかかったことはない。

やられちまった、こいつが一目惚れか。あの子に会いてえ。笑つちまうことに、どうしようもなくあの子に会いてえ。会つて、話しかけて、うお！ 死んじまう！ 話しなんかしたら、あの瞳を目の前に、耐えられねえ、おじさん嬉しさに舞い上がつて、失血死しちまうよ。

あの子と話せたらな、良い匂いするんだろうな……、どんな声で話すんだろうか？ きつとか細くも芯のある、濁りのない冷やかな声で、さつと受け答えるだろうな。ああ、笑うかな、笑い顔はどんなだろうか？ 笑顔を振りまかれたら、ミイラだつて潤つちまうだろうな、半端に乾いたおれなんか、溢れて破裂しちまいそうだ。

でもあの子は行つちまつた。けちな心に遮られ、話しかける機会を失つた。いや、無理だ、改札機を通過したつて、どうしてこんなおれが話しかけられる？ 一つだって持つていやしない、あの子に立ち向かえるだけの、あの子を惹く為の道具なんか。せいぜい狡い小細工を弄するだけで、本物になんかてんで通じないのがおちだ。

なんで今頃一目惚れなんかするんだよ！ 金も職もなくていい、知識も経験も要らない、たつた一つ若ささえあれば！ そうだ、向こう見ずな血気溢れる若さがあれば、おれは改札機を乗り越えて、駅員をぶん殴つてもあの子に辿り着いているんだ。

たまらねえよ。こんなおれの歳になつて、若者だけが味わうべく一目惚れに襲われるなんて、いったい何の因果があつてこんな目に遭う？ お門違いもいいところだ、神様も耄碌してやがる。

あと二十年若ければ良かった。それならおれも遠慮なく、あの子を惹く為に命を捧げたさ。あの子が笑い喜んでくれるなら、おれはどんな境遇にだつて耐えて、あらゆるしがらみにそつぽ向かず、真正面に立ち向かい、描かれた人生を切り拓いたさ。ああ、あの子がおれに！

けど遅い。中年男の青い夢なんざ、湿気たマッチほどにも価値がねえ。あまりに現実を見る目が肥えて、擦る気さえ沸いてこねえよ。

それでもあの子に会いてえな。話しかけるなど、おこがましいこと望まないから、もう一度だけ、あの広い瞳に射抜かれない。ああ、それでいいよ、ほんと。

もう会えないか？ いや、会えないこともなさそうだな。海老名か厚木だつて、違うな、小田原だ。小田原の改札を毎日張つてりゃ、

もしかしたら会えるかも？ そうだろ、会えるだろ。小田原だめなら、厚木と海老名も張ればいい。大した仕事をしてるわけじゃねえ、そんなの放り出して、あの子を探すのに日を尽くせば、いつでも会えるだろう。生活パターンさえ知ってしまえば、駅で長く待つこともない。

それはいいな、それならこのおれでも出来るぞ、あの瞳を覗くのなら、おれだってそれぐらいは頑張れる。へたに話しかけて、現実を突きつけられるよりも、最初から現実をわきまえて、遠くから眺める事に徹すりゃ、そうそう痛い目にも遭わないだろ。

馬鹿野郎、そんな考え方が痛いんだよ。そんな負け犬決め込んでかかるから、今のおれに至ったんだろ？ そんな半端な事するぐらいなら、いつそあの子を忘れてしまえ！ ……ないよな、あんな瞳、たやすく忘れることできりゃ、そもそもこんなに悩まねえんだよ。

やっぱり話しかけてえな……、おつかねえけど、近くであの子を感じれりゃ、きつとよ、生んでくれてありがとうさ、両親に感謝すること間違いなしだ。いや、思わねえな、もつとましな体で生んでくれと思うだろ。

毎日見れば話しかけたくなるよな。話しかけて知り合いになれば、生活も潤うだろうな。あの子に合った身だしなみを揃えようと、必死になって働くだろうな、ああ、必死に働きてえな。

いやそうじゃねえ、必死に働いて身なりを整えれば、こんなおれでもそれなりに格好がつくだろ。そうだ、外見磨くことに必死になりゃ、中年だってちよつとぐらいは物になる。そうだよ、若い女を惹きつける衣服を身につけ、受ける話題を叩き込み、心を操る陽気な話術を揃えりゃ、あの子に話しかけても朽ち果てないような、頑

強な体に仕上がるだろ。

そいつはいい！ イベント設営の仕事に、女釣る事しか能のない、前田のような青年が幾らでもいる。仕事ができねえくせに、生意気に口ばっかり発達した、拳骨で思い切りぶん殴つても手を傷めるだけの、どうしようもねえのがたくさんいる。癩にさわるが、あいつらを利用して、あの子に話しかける為の、最低限の作法を身に着けるか。考えただけで腹が立つてくるが、あの子の為なら我慢してやる。我慢できなくなったらぶん殴つてやる。

あの子に話しかける事も夢じゃないぞ。なんだか、本当に話しかけて、仲良くなれそうだな、でも知り合っちなまえば、物にしたくなるよな。ああ、あんな子がおれの彼女に？ おお背骨が痒い！ もう彼女を作る歳じゃねえんだ、愛人だよな、別に結婚して不倫するわけじゃないが、そう愛人、まさかあの子結婚してねえよな？

あんな子がおれの女房だったら？ 想像するまでもねえ！ 金、金が必要だ、金、あの子に話しかけるには、ある程度の努力でないとかなるが、あの子を物にするとなると、莫大な金が要る。そうだ、金があればそれも可能だぞ！

もう一度事業でも興すか？ とろとろ働いたって、金なんか入って来ねえんだから、どかんと金を集めて仕事を興すか？ そうだな、もう一度社会の荒波に飛び込んでみるか？ うまくいきゃ、精鋭気鋭の中年社長なんかと呼ばれて、鷹だか鷲だか鶏だか知らねえが、乙な獣に喩えられ、経済紙面を賑わすだろ。そうなりゃ、女房は和服の似合う艶な女、細い体に強さを秘め、銀杏に結った玉の面に、静かに湛える二つの白眼、おっと、もう箱根湯元か。

梅雨の晴れ間も終いか？ あれだけ晴れてた午前の空も、すでに

重い雲に延して、小雨を降らし、じめじめした陰気を取り戻すか。

おお、ちょっと早いか、……それでも立派に膨らんでいる。ああ、陽に照るよりも、やはり露濡れた艶姿だな。

洗顔（前書き）

週末、仕事帰りに会社の同僚と飲みに行った女性は……。

洗顔

わたしだって、そんな事言つつもりじゃなかった。

仕事後でみんな疲れていたし、一週間の労働を乗り切った充実感で、やっぱり浮かれている部分もあった。飲み場での仕事の愚痴はいつものお決まりだったし、特に週末が激しくなるのもわかってきた。それに、わたしも進んで会話に参加して、日頃の鬱憤を吐き出していた。

別に、良い格好をしたいとか、正義感振りたいわけじゃなかった。松島さんはそんなことを言つて、わたしの発言を茶化して笑つたけど、そういう振る舞いをする気もないし、したいと思つたこともない。人の真剣を笑いの種にするんだから、悪気はなくても、松島さんも人が悪い。

きつと、飲み場を盛り上げるだけの、小さな余興ぐらいにしか思われてないんだ。日頃から人を茶化す事ばかり気にしているから、松島さんにとつたら格好の餌だったんだ。いつもは笑う立場にいるはずのわたしが、入社したばかりの女社員に対して、あんなにむきになつたんだもの、おかしかつたはずだ。

悔しい！ 小泉部長の悪口を言われたことも、松島さんにかからかわれたことも、同僚に指を差されて笑いものにされたことも。それでもまだまし、あんな仕事経験の浅い女に、仕事場の内情も働く上司の立場も知らない女に、自分の不手際を棚に上げて、人を悪く言うなんて。それも、そんなにかわいい顔してないくせに、若いつただけの理由で、課内のみんなにちやほやれされるから、媚びるよ

うな仕草をするんだ。ほんと演技のお上手な性悪女なこと。

ああいう女は打算が身についているんだ。小さい頃から、ああやって人の同情を惹くことばかり考えてきたから、すっかり体に染みついてるんだ。だから同情を惹かなくていいところでも、無遠慮に同情を惹こうとするんだ。厚かましい。

そんな小細工に引っかかる男もそうだけど、自分の意見なんかとつくに汚物に入れに捨てた、人の考えに同調するしか出来ない女にも腹が立つ。自分の立場ばかり気にしちゃって、普段はあんなに表情を変えて仲良く話すのに、ちよっと場所が変われば平気で人の事を笑いものにする。きつと、人間らしい誠実な心なんて持っていないんだ。

わたしは間違っていない。間違っていないからこそ、悔しさがひとしお募って仕方がない。みんななんで平気で笑えるんだろう？日頃はわたしも笑っていたんだろうな、ああやって実際に味わったから、今になって気がついたんだろう。なんて鈍感な心の持ち主だったんだろう、身をよじる悔しさに、突き刺す恥ずかしさも湧いてくる。

今頃会社みんなは、浮ついた酒の席に残ったまま、身勝手に怒った女の話に着に、人の気も知れない嘲りを交わしているんだろう。それで、あの女が変にわたしのことをかばったりするんだろう。ほんと腹が立つ。

別に小泉部長が好きなわけじゃない。話はねちっこいし、話す声は小さくて聞き取りにくいし、説明べたで男らしさが感じられない。自分勝手に仕事の段取りを変えるし、とても一人ではこなせない量の仕事を押しつけるし、鼻の黒子は汚く膨らんでいて、見るだけで

気分が悪くなる。理想の男性像からかけ離れた、一緒に並んで歩くのも恥ずかしくなる人だ。

でもあの人は仕事を愛している。要領悪く、決して仕事の出来るほうではないけど、一生懸命に働いているのを感じられる。

そんな人を酒の席で悪く言われて、黙ってなんかいられない。いつもは一緒になって馬鹿にしていたかもしれないけど、今日はなんだがおかしい。あの女の軽々しい発言が妙に心をかき乱す。お酒の飲みすぎかもしれない。会社じゃあんな事絶対に言わない。酒の席でも冷静を装って、気取った振る舞いをして、むしろみんなに影響を与えていたのに。

なんであんな軽率な発言をしてしまったんだろう？ あの時は無性に腹が立って、何も考えずに怒りをまくってしまった。それに今も腹立たしさは残っている。でも、言わなきゃ良かった。あんな目に合うなら、こんなに後悔するなら、言わなきゃ良かった。あんな小泉部長の為に、わたしの立場を揺るがすような羽目を犯すなんて、ほんとどうかしている。わたしらしくない、やっぱりお酒のせいだ。

会社みんなのことなんか考えたくない。小泉部長の黒子なんてほんといやだ。週末だというのに、なんでこんな憂鬱な夜を過ごさなきゃならないの？ 友人と一緒に一週間のストレスを晴らすつもりだったのに、なんで一人寂しく家路に向かって歩かなきゃならないの？ 見慣れた電信柱の灯りが、仕事帰りの夜みたい。ほんと腹立つ。

全部あの女のせいだ。あの女が、無神経に小泉部長を悪く言うからだ。じゃなきゃわたしも今頃、陽気に笑って酒を飲み交わし、次

の場所へと移動して、浮かれた夜の街に馴染んでいた。ちよつとばかり乱れた上着を直して、気持ち新たに同僚と笑い合っているだろうに。あの女、それと小泉部長のせいだ。そう、小泉部長のせいだ。もう、なんで小泉部長なの？

マンションの階段を苛立たしく駆け上がり、肩に提げる鞆から部屋の鍵を取り出した。あたしの部屋はこ洒落ていたのに、今では追いつけない生活に汚されている。照明は明るく、壁も優しい色だけど、なんか空気がよどんでいる。こんな時間に部屋なんかに戻ってきたくない。

鞆をボーリング玉のように投げ、上着を脱いでその辺に放った。洗面所に入ってまず鏡を見た。なんてぶさいくな顔なんだろう、もう死んでしまいたい。

髪を手早くほどき、無造作に一つに結わえた。化粧を落すのなんか面倒くさい。冷たい水を勢いよく流し、両手ですくって火照った顔にあてた。肌を通して、想いにすつと染みる。

皿洗い（前書き）

プロレスラーのような男が、皿洗いのアルバイトの初日を過ごす
……。

皿洗い

おれのごつい手じゃ無理だろ。大ジヨッキのグラスにさえ入れられないんだぜ？ ビールの小グラスなんか、人差し指一本入るぐらいがやつとだ。それにやたら力が強いもんだから、加減するのが難しくくて、とてもスポンジなんかじゃ洗えねえよ。慣れれば器用に洗えるかもしれないけど、アルバイト初日じゃどうやったって早く洗えねえよ。柄付きのスポンジも慣れねえから、グラスを貫通しそうでおっかないぜ。

いや無理だろ。『ぼけつとしてねえで、とつとと洗え』って言われたつてよ、こんな量の洗い物を一人でやれるわけねえじゃん。だつて、アルバイト一日目だぜ？ それに下谷君だつて？ 五つ下の先輩だつてよ、グラスで手を切つて、たくさん血を流して帰っちゃつたじゃん。いつも二人でこなす量なんだろ？ それを一人でやる時点で無理だぜ？ それも洗い物見習いの、機関車でも洗わせた方がよつぽど役に立ちそうな男だぜ？

だいたいよ、ちつぽけな大衆居酒屋の板前のくせに偉そうなんだよ。たかが魚を綺麗にさばけるだけだろ？ それだけのくせに、『ぼけつとしてねえで、とつとと洗え』つてよ、何がそんなに偉いんだよ。料理の腕磨く前に、もつと人格磨いてこいつてんだよ。まったく、どうしてこうひねくれた人が多いのかな、だから職人は嫌なんだよ。

このお通しの器さあ、いったい何を考えて作られてんのかな？ カタツムリの殻みたいな形して、奥を洗うのがすげえ面倒くえんだけど。普通の小鉢でいいじゃん、なんでわざわざ客が食べにくいよ

うな器を使うのかな？ 新しいとか思ってたのかな？ すごい気持ち悪いんだけど。

ほらまただよ、カタツムリの殻が割れちゃった。ちよつと握っただけですぐに割れるんだから、もつと頑丈に作れよな、まるで蟬の抜殻だよ。いくらおれの力が強いって、ちよつともろすぎるぜ。これで二十六個目だよ。これなら全部割っちゃまおうかな、そうすりゃこれからカタツムリを洗うこともねえ。その前に今日でアルバイトを辞めるか。

おい、ホールの女の子さあ、忙しいのはわかるけど、もうちよつとましな片付け方してくれない？ なんでカクテルグラスに納豆巻きをぶち込むのかな、ええっ？ もつとさ、捨てるものは捨てるもので、一ヶ所にまとめてくれよな。ねばねばがこびりついて、洗うのが超めんどうくせえんだけど。それに『おねがいます』と一声かけて、目を合わせてくれないじゃん。何も言わずにがしゃんと置かれると、洗うほうもすげえ気分悪いんだけど。

しかしあわただしい店だよな。無駄にだだっ広いくせに客が入るから、洗い物が止まらねえよ。こうなるなら、一度食べに来てからアルバイトの応募すれば良かったよ。電話連絡で採用してくれるから簡単で言んだけど、實際来てみればひどえ所だ。そもそも高い時給に誘われて、皿洗いなんて選ぶんじゃないやなかった。皿洗いなんて誰でも出来るものだと甘くみていたけどよ、やりがいも何もねえひでえ仕事だよ。鼻糞ほどの楽しみもねえ。これなら、近所にあるゼウス洗車所とかいうところで、車洗ってるほうがよっぽとましだな。あれなんか力で擦りつけばいいんだもんな、皿なんてすぐ割れちゃうから、神経ばかり使って背中がむずむずするぜ。

しかしひでえ洗い物の量だ。なんでこんなに皿があるんだよ、ほ

んと食いすぎだつて。あの板前、ほとんど汚れていない皿もぶち込むから、逆に皿を汚しているよ。小さな洗い物ぐらい、刺し場近くのシンクで洗えよ。いくら皿洗いがあるからって、横着して全部任せるなよ、こつちも大変なんだから。

おいおい、ホールの女の子、割り箸ぐらいまとめて片付けてくれよ。なんでわざわざ焚き火を起こす様に、円を描いて並べてあるんだ。これ絶対いやがらせだよな？ 洗い場にいる新人の男が一人であたふたしてるからって、わざと困らせようってんだな？ 性格悪いよほんと。

いてっ、また爪楊枝が刺さつたよ。大葉の陰に隠れてちゃ全然わからねえよ。客もこんな変なところに爪楊枝を置くなよな、あつ、だれか変なおっさんが使つたりしたのか？ 絶対刺さつたところが化膿するよ、おっさんの歯についた雑菌がしみついているんだぜ、ほんときたねえよ。

まったく自分でも嫌になる手の大きさと力だよ、どうひいきしても皿洗いに適してねえよな。こういう仕事はもっと小さな手で、あまり力のない人がやるもんだ。もっと几帳面で、素早い動きができるようなさあ、おれなんか図体でかいくせに素早いから、むしろ魚を捕まえる方が適してるだろうな。ああ壊してえ、この皿を洗うより、全部割るほうがおれはうまくできるぜ、畜生。

だからさあ、もつときれいに片付けて、『よろしくおねがいします』の一声くれよな、中途半端にかわいいから、顔面をぶん殴りたくなるぜ、ほんと。ひでえ、トレンチの中に醤油さしを全部こぼしてるじゃん、慌てるにもほどがあるよ。おい、カクテルグラスが割れたままじゃんかよ、これじゃあ、気をつけて取り除かないとシンクにガラスの破片が入っちゃうよ。

なんだよこれ、本気の帆船じゃん！ 刺身に船の器はわかるけどよ、もつと簡単な作りの船でいいだろ、なんでこんなに部品が分かれるんだ？ いくら船の所々に食材を細工したくても、これじゃあ食べる人だつて嫌気がさしちまうよ。おれなんかプラモデル作るの苦手だから、説明書がなきゃ、こんな複雑な船二度と組み立てられねえよ。ああ面倒くせえ、いいや、もう知らねえ。

やべえ、全然洗えてねえ。洗い物を持ってくる速度にちつとも追いつかねえ。そもそも洗浄器がない時点でやってられねえよ。こんな量の食器を全部手洗いで済ませる時点で、すでにこの店は間違っているんだよ。

下谷君もひでえよな、『今日はぼくの動きを見て、一生懸命ついてくるんだ。わかった？』なんて言いながら、三十分もしねえで消えちまうんだもん、偉そう話ばかりして、全然動き見せてくれねえじゃん。無理に早く洗おうと調子づいて、グラスを割って、血を流しながらいなくなるんじゃ、むしろダメな動きを見せたただけだよ。ほんと恨むよ。

ああうるせえ！ またあの板前が愚痴々々言ってるぜ、ほんと人格曲がっているよな、新人が困っているんだから、いびるんじゃなくて助けるよ。この皿の量見れば、どれだけ困っているかわかるだろ？ おれだつて一生懸命働いているんだよ。ああうるせえな、こういう奴にかぎって家庭の立場が弱くて、友達も少ないんだぜ。ほんと困るよ。

ああやつちまった。つい頭に血が上ったせいで、大ジョッキが破裂しちまった。弱つちいジョッキグラスだよな、大ジョッキのくせに簡単に割れるなよ。おいおい、破片がシンクに飛び散ってんじゃ

ん、これじゃ一度湯を切らなきゃあぶねえよ。

面倒くせえ、超めんどくせえ、これでまた時間が食われるよ。絶望するほど皿が溜まっているのに、洗うのを中断してガラスの破片を取り除かなきゃ、はああ、大きな地震でも起きて、皿を全部割ってくれないかな。おれも下谷君みたいに手首をすぱっと切って、病院にでも逃げようかな。

おい！ ホールの福耳女！ だから『よろしくお願いします』と声をかけて、人の顔を見てから下げた食器を置けよ。ほんと腹が立つぜ。ああまただよ、今度は七味唐辛子をぶちまけてやがる！

箱（前書き）

箱を前にして男は……。

箱

最初に見たのはいつだっけ？　一ヶ月前か？　それとも四週間前だったかな？　たしかそれぐらいだよな、はつきり覚えてないけど、その時はもっと簡単に出来たはずなんだよな。

漫画の見すぎか？　なんて漫画だっけ？　やけに人物の輪郭が尖っていて、線が多く、絵がごみごみして、なんだか迫力に欠けていて、そのくせ描かれている世界がよくわからなくて、あんまり面白くないんだよな。でも不自然な姿態を描いた場面が多くて、ついつい読み重ねちゃうんだよな。

日本のラーメンと同じかな？　馬鹿みたいな油が浮いていて、阿呆みたいに麺の量が多く、間抜けのようにスープが濃くて、畜生らしくもやしを載せ、チャーシューが悪魔のようにむかむかする。幼稚園児が食べても体に悪いと理解できるし、年寄りが食べれば胸焼けでご臨終するような味のくせに、食べた直後は「二度と食べに来るか！」と誓っても、数日後に再び食べたくなるような、毒を欲しがるような感じ。ちょっと違うか？　怖い物見たさというか、気持ち悪い物見たさというか、体に悪いとわかっていて欲しくなるような感じかな？

次に見たのはいつだったけかな？　二週間前ぐらいだったよな？　たしかその時の方が箱は小さかったよな、はつきり覚えていないけど、ずいぶん小さい箱だったな。それでもうまく出来たよな？　なんでだろう？　男だっけ？　女だっけ？　それとも子供だったけ？　いや年寄りだったか？　いや違うな、年寄りが登場した事は一度だつてないもんね、じゃあなんだ？　なんだっけ？　忘れちゃ

ったよ。

ちよつと突拍子過ぎたかな？ そうだよな、思いつきのような感じだもんな。別に酒に酔ってたわけじゃないし、睡眠不足だったわけじゃない。体調はむしろ悪かったぐらいだけど、ストレスが溜まっていたわけじゃないし、昨日ピンサロ行ったばかりだし、何か不満があつたわけじゃないんだよな。ただ、たまたま思いついてちよつちよつたんだよな。

そう、別に計画してたわけじゃないんだよな、前々から準備してたわけじゃないんだよな、じゃなきゃ、もつとうまく出来たはずだもんな。

ちよつと箱が小さすぎたのか？ けどこれぐらいじゃないとしくくりこない。もう一まわり大きければうまくいったかも？ でもこれがちよつといいよな、うん、これぐらいがちよつといい。いや、むしろもう一回り小さいほうがいいかもな。

衣類が悪かったのか？ そうだよな衣類は邪魔だったな。分厚い物は除いたけど、薄い下着はそのままもんな、これがやっぱり多しは邪魔になつたんだ。でも下着なんて触りたくないし、やっぱり下準備が足りないんだ。

下準備といえば、やっぱり力が足りないよな。そう、完全に力不足だ。これならジムに通って体を鍛えておけば良かった。そうすれば中途半端にならずに、ばっちり収まっていたんだろうな。

性別も関係あるんだろうな。やっぱり女にすれば良かった。男じや堅いよ、どうしても骨格と筋肉が邪魔するから。そんなのちよつと考えればわかるのに、やっぱり突発的だよ、我慢できなかったんだ

よな。なんでだろうな？ 目の前で眠っていたからか？ 前々から考えてたわけじゃないのに、いきなり試したくなっただもんな。

最後に見たのはいつだった？ そうだ三日前だ。あれはすごかった、漫画で見るような事を生で実感したんだもんな、こっ、くしゃつと、一瞬で綺麗に収まったんだもんな。鳥肌もんだったよな。あんなに気持ち良い体験はしたことないな、絵で見るより実際に感じるほうが、ずっと素晴らしかったもんな、でもあれか？ やっぱり夢だからかな？ 実際はあんなうまくいかないよ。

でも箱の大きさは似たような物だよな？ ああ、でも今回は男か、やっぱりそれがいけなかったのかも？ それにユニボに匹敵する力が必要だったのかもな？ やっぱり夢だ、じゃなきゃあんなにうまくいかない。

やっぱり女にすればよかった。それも小さくて、ほどよく肉のついた女の子がいい。やせぎすの女の子じゃ、簡単に出来るかもしれないけど、ちよつといびつだし、隙間が出来ちやいそつだ。やっぱり女の子がいいよ。もうちよつと我慢して計画を練ればよかった。衝動に任せて学校の男を使うことなかったんだ。こいつにも悪いことしたよな。

あと、生きてままだとだめだ。死んだ後にやっても、全然感じが沸かない。こっ、身震いするような実感は沸かないもんな。なんだか夢に見ていたセックスが、実際ほど素晴らしいものじゃなかったよな、まあ相手によるけど、そう相手が良くないんだよ。

やっぱり肉づき程よい若くて小さな女の子と、岩を持ち上げるよな力が必要だよな。女の子はなんとかなるにしても、力はどうにもならないな。プロテイン飲んでボディビルダー並みの筋肉をつ

ければ、いや、ちょっとやりすぎだよな。でもやりすぎぐらいじゃないと、こう、一瞬でくしゃっ、といかないんだろうな。なんか良い機械ないかな？ でも機械じゃ実感が得られなさそうだ。人間を生きながら、不自然に無理やり箱に詰めるには、それなりの努力をしないといけないんだろうな？ でもあの漫画の男は、片手一本で軽々とやり遂げていたし、夢の中では何度か出来ていたんだよな？

それにしても不細工な作品だ。友人にも悪いことしちゃったよ。こんなことになるなんて思いもしなかった。やっぱり骨と関節をもつともしない、強力な力が必要だったんだろうな。

家のパーティー（前書き）

俊道は自宅で眠っていると、慌ただしい音が聞こえて、ふと目を覚
ました。

家のパーティー

覚えのある調子の良い話し声と階段を降りるうるさい足音が、夢うつつの俊道に聴こえ、工事現場を歩いている夢から覚めてベッドの上で意識を取り戻した。遠くで聴こえたそれぞれの音が、今は鮮明に自宅の中に聞こえる。俊道は体を起こし、汗に濡れた背中に手を伸ばして、普段の自宅にはない音に集中した（何ダロウ？ 工事業者デモ来テイルノカナ？ ドコカ壊レタ？）。

「杉ちゃん、ちゃんと持つてよ！ ちゃんとだよ、不安定で危ないつて！」男の高い声はつきりと聞こえて、俊道はぎよつとした（エツ？ 克君ノ声？）。

「えっ、克君、ちょっと待って、ああ、ああ」すぐにえがらっばい男の返事が小さく聞こえる（コノ喋り方、杉チャンダ！）。

「だから、その持ち方で大丈夫？ って言ったんだよ」笑い声が少し混じる、あきれたような声がする（ヤッパリ克君ダ、ナンデウチノ家ニイルンダ？）。

「いや、大丈夫かなって、あつ、あつ」杉の話し終わるのを待たずに、俊道はベッドから起き上がって、自分の部屋を出ようとすると重い物の落ちる音が響いた。

「ああああ！ やっちゃった！」部屋の扉を開けると、嫌味のない大声が聞こえた。俊道は廊下を足早に歩いて、声のする階段へ向かった（何ダ今ノ音、何力落トシタ？）。

橙色のタオルを頭に巻き、黒いTシャツを腕まくりした大柄な後ろ姿が見えた。大きい背中に隠れて、大きな黒い固まりと、貧弱な長髪の男の端々も見える。

「克君！　なんでうちの家にいるの？」俊道が鋭く声をかける。

「俊君起きた？　見てよ、杉ちゃんがスピーカー落としたよ」両手で黒いスピーカーを支えながら、克哉は首を回し、面白い物を教えるように答える。

「ごめん俊君、ほんとごめん」階段に落としたスピーカーを持ち直す為、及び腰のまま杉が謝る。

「なんでスピーカーが？」俊道は思わずつぶやいた。

「杉ちゃん、次はちゃんと持ってよ、安くないスピーカーなんだからね」怒った様子を見せずに克哉が言う。

「うっ、わかった、次は大丈夫」見るからにつらそうな体勢ながらも、杉の顔には不気味な笑みが浮かんでいる。

「もう、軍手忘れるからだよ、杉ちゃん修理代は自腹だからね」杉の動きに合わせて、克哉がゆっくりと足を踏み出す。

「修理代？」状況が飲み込めない俊道は、疑問に思った言葉を口にする。

「階段が陥没しちゃったからさ、俊君おばさんに説明しておいて、杉ちゃんが払うから。ほら杉ちゃんもうすこしだよ」前を向いたまま、何でもなさそうに克哉が言う。

「ちゃんと、払うから」顔を赤くして重みに耐えながら、杉はどうにか言葉を絞り出す。

「はあ？」二人の言葉が耳を通り過ぎ、俊道は呆然としながら克哉の動く姿を見ていると、その足元に潰れた階段が覗けてきた。

「なにそれ！」俊道が叫んで近寄る。

「杉ちゃん、そのまま上に持ち上げて、一度立てるからね」克哉は杉に指示する。

「お、おう」太腿を震わせながら杉が返事する。

「これひどいよ、母さん悲鳴あげるって」俊道は気ままな克哉の背中に話しかける。

「大丈夫、杉ちゃんが弁償するから、杉ちゃんしっかり支えてよ、さつきと同じように、おれが下から持ち上げるから」克哉がたくましい下半身に力を入れる。

「おふっ」杉が不器用に太いスピーカーを抱える。

「弁償ってねえ、一体そのスピーカー何？　なんで二人がいるの？」俊道は顔をしかめ、頭を掻きながら訊ねる。

「俊君ちょっと待って、そうそう、杉ちゃんいい感じ、そのまま支えていてよ」克哉はスピーカーの底面を、慎重にフローリングの上に置く。

「よし、杉ちゃん一休みだ」克哉はシャツの襟元で顔の汗を拭う。

「ふう」杉は大きく息を吐いて、妙な笑みを浮かべる。

「ほんとひどい、見事に陥没してるよ」「えぐれた階段の傷跡を覗き込んで、俊道は溜め息をつく。

「俊君、今日は朝までパーティーだからね」階段に座り込み、克哉がうれしそうに言う。

「パーティー？ どこで？」俊道は怪訝な顔して見上げる。

「どこって、俊君の家にきまつてるじゃん。じゃなきゃスピーカーなんか運ばないよ」克哉が人受けする笑いを浮かべる。

「うちの家で？ 勝手にそんなでかいスピーカー運んで、いったい何のパーティーを始める気？」俊道は両手を広げて問う。

「いつもやってるパーティーだよ」克哉も真似して両手を広げて答える。

「それって、毎週野外で開いている、気の狂ったようなパーティーのこと？」気の狂ったの部分に力を込め、俊道が両手を広げたままの格好で訊ねる。

「そうだよ、気が違った楽しいパーティー、さあ杉ちゃん、この人殺しを運んじゃおうか」そう言って克哉がスピーカーを三度平手で叩く。

「あっ、ああ」杉が単に返事する。

「うちの家で出来るわけないじゃん！ 母さんに怒られるよ！」俊道は左右に手を振って拒否を示す。

「俊君、出来ないことをやるのがフロンティア精神だよ？ 開拓者は進んで前へ歩かなきゃだめだつて、それに俊君のおばさんに許可もらったしね。杉ちゃん、また横に倒して持つよ」妙に気取った風に話して、克哉はスピーカーカーを持ち上げる。

「えええ？ 母さんが？ なんで？」顔の中心に皺を寄せ、鼻の穴を広げて俊道が声をあげる。

「なんでつて、『今日の夕方からパーティーを開きたいんですが、俊君の家を使つても大丈夫ですか？』つて訊ねたら、おばさん嫌な顔一つしないで、『いいわよ、盛大にやりなさい』つて快く了解してくれたよ。すごい乗る気ださあ、ドイツカラーのパーティーにすると伝えたら、『パーティーの色に合った、ドイツの料理を用意しましょう』つて言つて、物販に協力してくれるつてさ、本当に陽気な人だよな、俊君のおばさんは」

スピーカーカーを運びながら、声に抑揚をつけて克哉が話しをする。

「ひどいよ克君、うちの母さんを騙したね？ パーティーという言葉のイントネーションを下げた話したでしょ？ 母さん普通のパーティーと勘違いしているよ、ねえ、母さんはどこ？ 理由を説明しないと大変な事になる」克哉の背中について歩き、俊道が一人慌てる。

「騙したなんてとんでもない、イントネーションだつて普通に話したさ。おばさんは買出しに行つてるよ。二百人前ぐらいの量がある

ば充分だつて伝えたと、大喜びして買出しに出かけて行つたよ、なんでも、近所のお友達と料理の準備をするみたいだよ、俊君のおばさんは、本当にフロンティア精神溢れる人だね」

克哉は廊下を通り抜けて、ベランダに面する広い居間に出る。

「そんなの知らないよ。母さん人に振舞うのが好きだから、二百という数字に酔つたんだよ。どうしよう、実際のパーティーが気の狂つた踊りだと知ったら、母さんきつと卒倒するよ、その前に階段の陥没を見て卒倒するかも、なにこれ！」

ドイツカラーに様変わりした居間の内装と、設置の準備をされた多くの機材を見て、俊道は強烈な叫び声をあげる。

「運ぶ順番が悪いよ、スピーカーを先に設置しないと、ブースの準備が出来ないじゃんか。とつくに機材とコードの準備は出来てるんだ、早く設置してよ」縁のない眼鏡をかけた幸孝は、整然と並べられた機材類を確かめつつ、スピーカーを運ぶ二人に声を飛ばす。

「幸孝君、何これ！」俊道の目には、おぞましい音を作り上げる悪魔の細切れに見える。

「俊君起きた？ 君も仕事があるんだからね、歯を磨いて顔を洗つたら、機材の設置を手伝ってもらつよ」むっとした顔を幸孝は見せる。

「俊君寝起きだからさ、昼飯食べてからでいいんじゃない？ 杉ちゃん、ここも同じように上を持ち上げて、一度ベランダの上に置くよ」克哉は笑いながらスピーカーを下ろす。

「ねえ、幸孝君、ほんとにうちの家でパーティーを開くの？」俊道の顔が若干青ざめている。

「愚問だね、これ見てわからない？ 今回は君の家を拠点に、空間をジャックすることに決まったから。簡単に言えば、広く頑丈なベランダをブースにして音を吐き出し、手すりからスクリーンを垂らして視覚効果溢れる映像を流す。向かいのマンションに許可をもらったから、プロジェクターの設置は問題ない。適度に広い芝生の庭は、裸足で踊りたがる人に使ってもらい、多くの人は目の前の道路で踊ってもらう。音を流し始めたら一方通行の入り口を鉄柵で塞ぐから、これも問題ない。ゆったりと気分に関りたい人には、一階と二階の居間をラウンジとして、ちょっととしたカフェ気分を味わってもらう。料理は俊君のおばさんが作るドイツの家庭料理で、これは今までにない俊君の家ならではの空間だね、これには僕も凄い期待している。アルコールは杉君が夜な夜な街を徘徊して、バーの裏口から盗んだホーフブレイの樽がある、グラスも大丈夫、やっぱり杉君がどこかしらから集めてきたから。装飾はいつもの通り、超前衛的デザイナーを自負する正二君が担当する。なんでも今回のテーマはドイツと牢獄、それから意識からの解放をかけ合せたらしく、腸詰と鎖を融合させた連結を意味するロゴデザインを使い、ドイツカラーにサイケデリックな歪みを組み合わせた、新しい三色を主にデコレーションするらしい。実際僕も意味がわからないけど、いつも通りパーティーが始まれば馴染むと思う。ただ、腸詰が前面に出すぎている気がするけど。そして、家の中にある各部屋はお客様のレストルームとして、お金を払ったお客さんだけに貸し出す。もちろん俊君のおじいさんとおばあさん、弟さんと妹さんにも許可をもらったから大丈夫、むしろみなさん喜んでいたよ。おじいさん方は今近所を回って、普段カラオケばかりしているご老人方を誘っているし、妹さんも部屋にこもってたくさんの友人にメールを送っている、弟さんも、同じ塾に通う友達を誘うと言って出かけたよ。俊君

の家族は協力的だね、でも、君が一番協力してくれると僕は信じている。杉君が大量の薬物を用意しているから、君がパーティーの土気をコントロールするプッシャーとして、君の部屋を訪れる人をあげあげにさせて欲しい。これが最も重要な役割だよ、俊君、杉君じや一時間もしないうちにこの世の人じゃなくなるから、冷静に薬物を使用できる君が適任だ。わかった？」

真面目な顔した幸孝は、俊道の肩に手を置く。

「やたら広い家に、人通りの少ない道路、それに人が踊れるマンションが周りにある。俊君の家はパーティーを開く為に在るようなものだね、最高だよ」ブースを設置し終えた克哉が、誰もを感化させる笑顔浮かべて力強く親指を立てる。

「最悪だよ！ 何なのこれは！ 意味がわからないよ！」両手で頭を抱えて俊道が叫ぶ。

「寝起きだからだよ、歯を磨いて顔を洗ったら、すぐに目が覚めるつて。よし、音を出す準備をしよう」幸孝と克哉が機材の設置にとりかかる。

「へへ、俊君、たくさん薬物用意したから」杉が気味の悪い笑顔を浮かべて、俊道に近づき小声で話す。

「しなくていいよ！」痙攣したように頭を揺らして、俊道が生々しく睨む。

「ゼルブストフェアシユテントトリッヒ、幸孝君、プロジェクターもゼルブストフェアシユテントトリッヒだよ！」ベランダのちょうど正面にある階段の踊り場で、芋虫と見間違えそうな、色の悪い小さな

ウイナー柄のシャツを着た正二が、顔を強張らせて軽薄な声を出す。

「ああ、それは良かった」幸孝が適当な返事をする。

「ほんとゼルブストフェアシュテントリッヒだよ、一度こつちに来て確かめて見てよ、ほんとゼルブストフェアシュテントリッヒだから」正二がさらに顔を硬直させながら、間延びさせて話す。

「何あれ！ あんな人がいたら、申し訳なくて、近所の方々に顔を合わせられないよ！」ベランダに近づいた俊道が両頬に手を当てて話す。

「正二君はちよつとここがおかしいからね、まあ我慢してよ」配線を繋ぎながら、幸孝はこめかみをこつこつと叩く。

「あんな人知らないよ！ 正二君つてもっと滑らかな人だったでしょ？ あんな顔面の人見たこともないよ！」正二をはつきりと指差して俊道が馬鹿にした声を出す。

「そうだっけ、正二君つてあんなもんじゃない？ おれもよく覚えてないけど」克哉が素早く配線を繋ぎ合わせながら、知ったように話す。

「克君、ちよつと、これ、吸ってきていいかな？」杉はにたにたしながら、ビニール袋を吸い込む仕草を見せる。

「だめだよ、配線を繋ぎ合わせてからだって、立ってないで杉ちゃんも手伝ってよ」克哉が杉に手招きする。

「いや、杉ちゃんの手伝わなくていい。そのかわり、お湯の入った洗面器と歯ブラシを持って来て」幸孝が温かみのない言い方をする。

「幸さん、レコード持って来ました」三つ積み重ねたレコードケースを抱えて、顔を赤くした雅史がやって来た。

「おお、ご苦労」幸孝が当たり前のように声を出す。

「俊さん、やっと起きたんですか？ ずいぶん遅いお目覚めですね、やっぱり家を貸す人となると、準備に参加しないで寝ててもいいんですね」雅史は黒いＴシャツをぴったり肌に張り付かせ、異様な臭いを放ちながら俊道に近づいて話す（チツ、コノ人八何寝ボケタ顔シテンダ？ 大事ナ準備ダト言ウノニヨ、頭ガ腐ツテンジヤネエノ？ 家ヲ貸ス以外ニホトンド取り得ノナイクセニ、幸サンヤ克サント対等ニ話シヤガツテ、調子ニ乗ルナヨ）。

「えっと、雅史君だっけ、そんな言い方ないと思うよ。ぼくは全然知らなかったんだからね、目が覚めたらこの有様だよ、羨ましくもなんともないよ」俊道はかすかに眉間に皺を寄せて、すねたように話す（何コノ人、スゴイ汗臭イ）。

「ああそうなんですか、へえ、そうですね家でパーティー開けて、そういえば、俊さんは今日何を流すんですか？ 俺は真っ黒いのを流して、踊り子達を虜にしますよ」やけに胸を張って雅史が偉そうに話す（フン、家ヲ貸シタカラツテ、選曲ガ悪クチャ話ニナンネエヨ）。

「ぼくは何もしないよ」俊道は少し声を小さく話す（ナンカ、スゴイ嫌ナ感ジ）。

「俊君はポップスしか聴かないからね、レベルの高いポップスのリスナーだよ」克哉が弁護するように口を挟む。

「あつ、そうですか、ポップですか、そうなんですな、すみませんね、わからない話しちゃって」あからさまに蔑んだ顔をして、雅史が嫌味な笑い声をあげる（ハア？ コイツポップ育チノ、オ坊チャンカヨ、ケツ）。

「よし繋がった。雅史、レコーダー一枚取れ、試しに音を出すから」幸孝が毅然とした声で雅史に命令する。

前のマンションから「ゼルブストフェアシユテントリツヒ」と連呼する声が聞こえる中、幸孝が黙々と機材の電源を入れて行く。克哉は変わらず陽気な笑みを浮かべ、杉は落ち着きなくわき腹を掻き、雅史は尊敬の眼差しを幸孝に向ける。俊道がひどく心配そうな顔をして見守る中、回りだしたレコードの上に幸孝は慎重に針を乗せる。

「ブン、ブン、ブン、ブン」

巨大なスピーカーから轟音が吐き出されると同時に、窓ガラスが割れ、電線は大きく浪打ち、電信柱も細かく震え、多くの雀が真つすぐ地に落ちた。

カラオケ（前書き）

チームメイトとカラオケに来ると……。

カラオケ

彼は所属する野球チームの関係者と一緒にカラオケに来た。輪の中には、同年代や少し歳の離れた仲間と共に、コーチや監督も混じっている。

ここ来る前に試合があったはずだ。テレビで観戦していたのか、それとも実際に参加していたのかはつきりしないが、関係者通路で搬入の車が入りするのを見たのだから、よほど親しい所に彼はいたのだろう。一般の観客にはとても目にする事のない光景だった。注意を意味する赤い標識もたしかに見ていた。

大きなブラウン管モニターは部屋の高い位置に据えつけられ、室内には明るくも暗くもない蛍光灯が、安っぽい擬似の夜光を放っている。パーティールームのような広さであり、横に長い座席がやけに安っぽく、彼は窮屈に座り、チームメイトと一緒にモニターを眺めた。

現役時代は渋いキャラクターで通っていたピッチングコーチが、陽気に笑いながらも落ちつきのある調子で話しながら、リモコンを操作して曲を予約していく。理由はわからないが、何か喜ばしいことでもあったのだろう。

彼は歌うのが苦手だった。出来ることなら歌わずにやり過ごしたかった。しかしバックスクリーンのメンバー表を見るように、モニターには七番の打順で彼の名前がある。曲名は聞いたこともないが、彼だけに与える多くの意味を含んだ漢字が、ゴシック体ではっきりと記されている。

まず彼は七番という歌順に不満を覚えた。六番の男は小学校以来の知人であり、日頃から付きあいの多い友人でもある。自分の方が打力は上だと思いきこんでいるので、彼の前を打つ友人が気に食わなかった。

カラオケは始まり、すぐに四番目に回ってきた。イントロが始まり、水商売風の不恰好なスーツの男がモニターに映し出されると、聞き覚えのある歌が流れた。茶色い髪の方が分厚い唇を開かせ、まぶしそくに顔を歪めてモニター内で歌うのを見ながら、彼は息を吐いて体の緊張を弛ませる。歌う人の歌唱力の是非ではなく、自分の知らない曲名でも、聞き覚えのある曲が流れるのだと安心した。

するとすぐに、五番目の曲名が青いモニター画面の端に記された。見たこともないアルファベットの曲名に、意識障害を起こしかねない真っ青な画面の色だ。それもなぜか彼の名前も一緒に記されている。五番目の曲なのに、いったいなぜだろう。チャンスでも回ってきたのか。

予期も出来ない唐突な事態に彼は驚き、ただ目を見張ってモニター画面を眺めるしかなかった。とにかく歌わなければならぬ。彼はふと、予約が消去されて順番が早くなったのだと思った。

彼は細い通路へ歩き出した。メトロへ続く地下道らしく、筒型の通りは奥行きが長く、不気味な静かさに包まれている。壁面はやけに色の強い橙のレンガに貼られ、壁の裏に隠れた無数の配線からもたらされる、焼けた銅と解けたゴムの臭いが充満し、天井は鳥肌を催させる銀色のタイルに埋められる。松かさのようにとげとげしく、まるで単一色の魚鱗にしか見えない。

人々は左側通行で黙々と歩いている。彼は背後から急かされる様に、足早に人々を抜かして行く。急ぐ理由は彼にもわからない。向かいから歩いてくる人を見ては、黙々と歩く人の列に割り込んで入り、通る人と服を擦れ交わしてやり過ごす。

人種と文化が入り混じっている。力士らしき出で立ちの黒人がいれば、モンゴルの民族衣装を着て歩く白人、古い西洋貴族らしい南洋の人種もいる。長い時をかけて区分された堰は壊れてしまい、すべてが混一してしまったようだ。

人々を不思議に思いながらも、彼は追い詰められるように先へと進んでいく。通路は突き当たり、左右へと別れる。彼は歩調を緩めずに右へと曲がった。

筒型の通りは渡り廊下のようになり、先の見えない通路に沿ってガラスのない窓枠が狭い間隔に続き、外の景色が広く覗ける。通路は高い位置に通っており、生い茂った色艶のよい木々の頭が、雲海のごとく外の底面を占めている。彼は歩を遅めて景色に目をやった。人々が一切見られない。

彼の目に、白いドーム型の建物が、異様な存在の象徴として映った。外は快晴らしく、輪郭を彫りこまれように浮き出て、おそらく日光は射しているのだろうが、ドームにも緑の木々にも陽は当たっていない。それでも、ドームは体を白光させているかのよう、空間を膨張して威圧している。

すると突然、おだやかに処理された耳心地の良いノイズ音が鳴り響き、その上を愛くるしい信号音が残響を残しながら、ブルースギターのようになり出す。はっとして彼は立ち止まった。生き物のような信号音は勝手気ままに動き回るも、存在の小ささに、ノイズ

を飛び越えさせることをさせず、皿の上からはみ出ることは決してない。

深海からゆっくりと優しいリズムで、単純な旋律が浮かびあがってくる。エフェクトを撫でつけられ、ワンループごとに色彩をぼかされ、明調を変えてノイズと気持ちよく溶け合っていく。

リバーブをかけられた若い男の声が、原始意識に問いかけて歌い出し、短いフレーズをまじないさながら繰り返す。怖気をかもす祈禱でなく、曙光を眼窩の奥に見出す神々しさだ。

彼は瞬間笑顔を浮かべた。この曲を知っている、この曲を知っているのだ！ 白いドームが音に震えて、あたりの空間は振動に占められる。鼓膜でなく細胞自身が音に喜び悶え、透写する音の波動が肉体を通過し、精神に直接訴えかけるようだ。男の声は五度高く歌いだし、上と下にかぶせられ、上は協和、下は不協和を、長い間延びた声でもって、神経症のビブラートを響かせながら、バンドネオンの胸のように広げていく。

軽快なギター音が曲の展開を変えたところで、彼は道を引き返して駆け出した。まばらに歩いている人々を颯爽と追い越して、先ほどの突き当りから見て、左手の道へと進む。

雄々しく叩かれる太いドラム音に合わせて、関節を失ったように首を振りながら、彼は上半身を前に突き出し、腕を大きく振って駆けていく。彼はマイクを欲しかった。この曲は日本語の曲ではない、たしかに英語の曲だ。彼は英語の曲なんか歌えない。カラオケに恐怖する。しかし確かにこの身に響いてくる、絶頂に向かう音のうねりを体感しては、叫びださずにはいられなかった。

曲が進んでいく。加速して駆ける彼と共に、曲は刻一刻と命を削り取られていく。密度のつまった旋律の動き、さりげなくオレンジの陽気を与えるギターのループ、雲間から差し込む光を駆け上っていくような解放された男の唸り声、一つ一つが彼の心を高潮させて、歌い出したい気持ちを煽り立てる。

表情を変えずに歩く異民が、静脈のような地下通路に無機質な足音を立てる中、彼一人がたぎる感情を足音に変えて駆けていく。段数の少ない階段を幾つか跳び越えて、ペースを落さずに、音の切れ端でも掴もうと必死にもがく。

ふとすると、緑色の人工芝が開けた。彼は一塁側のダグアウトに開かれた目を向けた。チームメイトはすでに誰もおらず、空間を流れていた曲も既に果てていた。広い球場にとってはあたり前の静寂が戻っていた。彼は一人取り残されたような心持ちを感じ、わびしい思いにさらされた。

曲は終わり、チームメイトもない。ベンチの上にはチームメイトの名残らしい、なにやら書類らしき物が雑然と散らばっている。彼は近づいて一番上の書類を手を取った。それはルーズリーフを区分する、名の書かれていない付箋だった。

配達（前書き）

高校生になったばかりの重幸は、原付の免許を取得してアルバイトを始める。

配達

重幸は高校一年生になったばかりの十六歳だ。誕生日が四月の十日とあって、多くの同級生より先に原動機付自転車の免許を取る事が出来た。中学生の時、風貌乱れた同級生が盗んだスクーターを乗り回していたのを、川原でラジコン飛行機を飛ばしていた重幸がたまたま見かけて、それ以来スクーターの運転に憧れるようになった。スクーターを運転出来ることは、大人の男性へ一歩近づくことであり、かすかな悪の匂いを持つことになると思っていた。

わざわざ誕生日に学校を休んで免許を取りに行き、その日の夕方には、触ればかぶれてしまいそうな紫色のスクーターを購入した。アルバイトをして返済する約束で、何とか親に頼み込み代金を前借した。

それとなく締まった心地好い寒さに、花の香りが揺れる春の夕暮れ、てかてかに光る赤いヘルメットをかぶり、物干し竿を刺したように背筋を伸ばして、川原道を低速で走りながら重幸は雄叫びをあげた。

さっそく重幸はアルバイトを探した。スクーターを買うと決めた時からやりたい仕事が決まっていたので、ほとんど迷うことはなかった。バイクに乗りながら働けるといえば、配達の仕事だ。ピザの配達にするかラーメンの配達にするか、それとも馴染みのないインド料理を配達するか、特に料理の好みはなかったが、乗りたいバイクは幾つかあった。流れるようなラインが格好良い、屋根ついた現代的なピザ屋のスクーターは一般受けする魅力があり、ボディがすかさずながら、スピード感のある黒いインド料理屋のスクーター

も捨てがたく、赤い中華料理屋のスクーターもやたら派手でたまらない。

しかし重幸は寿司屋で働くことにした。スクーターでは味わうことのない技巧を要するギア付きバイク、古いスーパーカブこそ最も求める物だった。オイルの臭いを想起させる昭和の重みを備えたボディーに、ぶつきらぼくに料理を保護する鋼の出前機、それに渋いとしか思わせなくすんだ緑が色を飾る。重幸にとってスーパーカブは仕事人の乗り物であり、高校生臭さをかき消す社会のバイクだった。

ラーメン屋や蕎麦屋もスーパーカブを使っていたが、免許取れたての重幸にとつて、汁物を運ぶことは難易度高く、器をこぼして客と店主に怒られる景色をどうしても思い浮かべてしまう。寿司もひっくり返すかもしれないが、汁がない分だけ心にゆとりが出来る。

四月の最後の週から重幸は働き出した。薄汚れた雑居ビルの四階部分に店があり、カウンターが八席と、畳の座敷部屋が三つ連なっているだけだ。宅配専門の寿司屋ではなく、一人の板前とその奥さん、あとは板前の母親が切り盛りする、地域ではある程度馴染みのある店だ。それでも客が食べに来ることはまったくなく、多くが出前で成り立っている。重幸は最初店に入った時、酢で湿気ったような薄暗い店内と、寿司桶が重なり伝票の散らばったカウンター席に、吐き気を催す汚れた不安を覚えた。

一日目は桶さげから始まった。異様に目玉の大きい、角刈りの板前から地図の見方を教わり、酢の匂いが染み込んだ薄手の半被を着て、出前機のぎしぎし揺れるスーパーカブを走らせた。幾度も心に描いたギアチェンジの動きは、実際に行うと予想だにしない強いエンジンブレーキを引き起こし、点火したねずみ花火を手に持つこと

く重幸を慌てさせた。何度も道に迷って苦労したものの、宝探しをするほとばしる心持に、重幸の初日は期待に勝るものだった。

それから、暇な時間は皿洗いをして待ち、注文が入ったら配達に行き、ついでに桶を下げるようになった。最初は戸惑ったギアにも慣れ、どの程度のスピードにどのぐらいの坂道なら、いつギアを変えるべきかもなんとなくわかるようになった。大量の桶を出前機に載せて、エンジンを唸らせながら車の脇を抜ける、そんなハツピ姿の自分に重幸は度々酔いしれた。

忙しい五月の連休を乗り越え、重幸の配達技術は大幅に向上した。道に迷うことは何度もあった。注文していない寿司を届けたこともあった。雨に濡れた地面に滑って寿司をひっくり返してしまい、砂利のついた濡れた手で、必死にマグロの握りを並べ直したこともあった。柔らかい土の上にサイドスタンドを立てて、すこし離れた玄関前に桶を取りに行く間に、不安定なスーパーカーブは倒れ、散歩する婆さんを潰しそうになったこともあった。それでも、なんとか仕事を無事にこなしていった。

方向音痴ながらも、繰り返し道を走ることによって、迷う回数は少なくなった。常に全力でアクセルをまわし、際スピードを保ちつつ道を曲がり、赤信号に変わって三秒までなら平然と道を通り切り、人がいなければためらいなく信号無視するようになった。下手くそな歌も大声で歌うようになった。

角刈りの板前にも気に入られた。仕事終わりには、刺身の切れ端を丼飯に載せた、具の多いまかないを頂いた。板前は仕事終わりになると必ず酒に酔い、顔を赤くして重幸に大人の雑談を聞かせた。奥さんを卑下して偉そうにする板前に、重幸は今まで見たことのない得体の知れない人間を見た。そもそもこの寿司屋の存在自体が、

若い重幸の理解を超えた非日常な世界だった。

梅雨に入ると雨が多くなった。常連客をだいたい覚え、道にもほとんど迷うことはなくなった。スーパーカブの性能も把握し、ガソリンの切れるタイミングもおのずとわかり、給油するスタンドもパターン化された。下り坂のトップスピードは良いとして、上りの馬力の弱さに不満を覚えていた。乗り出した頃は楽しかったギアチェンジも、面倒臭いだけの作業になっていた。屋根のない裸の車体に、何度怒りを覚えただろうか。だから洗い物をしているほうが楽だと、次第に思うようになった。板前の愚痴の内容も同じ場所を回わっていると気づいた。

夏になると、スーパーカブに限界を感じるようになった。どう頑張っても、ピザ屋やインド料理屋の機能性に勝てない。いくらショートカットして信号無視したところで、乗り物の性能が変わらないことには、配達時間を縮めることは出来ないし重幸は悟った。

すると、配達の間になんかだけさぼれるか求めるようになった。今までの経験を活かして、配達にかかるであろう時間を割り出し、素早く寿司を届けると、余った時間で自分の好きな事をした。漫画を立ち読みし、友人に電話して、スピードクジを買った。運転中は覚えただけのタバコを吸い、飴を舂め、ガムを噛み、唾を吐いてアイスを食べた。特に暑い時期とあって、自動販売機のアイスが重幸の好物になり、仕事の間にも必ず二回食べた。半被を着た若い配達員の間抜けな顔してアイスを食べる姿に、なんら疑問を感じずに。

八月のある日、重幸が配達を終えて、ちょうどアイスを食べながら店に戻る途中、小さな商店の前で友人と出くわした。時間を潰す絶好の機会を見つけ、重幸は快活にスーパーカブを停めてその友人と話し始めた。左手に食べかけのアイスを持ち、右手にタバコを持

ったまま、何の警戒もせず話していると、ちょうど買い物帰りらしい板前の母親が脇を通り過ぎた。重幸はぎよっとしたが、何くわぬ顔のまま友人と話し続けた。板前の母親は振り返ることをしなかった。重幸は気がつかなかったのだと、都合の良い解釈をした。

少し不安に思いながら重幸が店に戻ると、板前が眼を血走らせながら近づいて来て、大声と共に思い切り重幸の顔面を殴りつけた。虚をつかれた重幸は言い訳する暇さえ与えられず、そのまま壁に叩きつけられて気を失った。

その日をもって重幸は寿司屋を辞めさせられ、代わりに、自慢のスクーターで歯医者へ通うようになった。

機内（前書き）

転勤で見知らぬ国へ向かう飛行機内、男は隣の座席の男と会話をす
る。

機内

シャガン・スクルブ九〇四便はモンゴル平原上空を西へと進んでいた。周囲には雲なく、昼下がりの光線を受けた地上に、影の濃い稜線が浮かびあがっている。峰と谷間に雪を残し、斜面にかすれた茶色が見える。

会社員田島は窓から顔を離して、重たげに座席にもたれかかった（ハアア、外ノ景色ニモ飽キタナ。飛び立ツ前後ハ多少心モ浮キ立ツタケド、三十分モスルト、狭イ空間ニ圧迫サレテ退屈シテシマウ。眠リタクテモ、コンナ座席ジャ頭ノ位置ガ落チ着カナイ）。

だるそうに首をすこし傾げたまま、正面の座席背部に据えられた画面に手を伸ばす（映画モ暴力モノシカナイ。ソレモ所々皮膚ノ色ノ違ウ、継ギ接ギサレタ人間シカ登場シナイバカリデナク、見テイテ胸糞悪クナル、集団暴行バカリ画面ヲ占メル）。

一つ息を吐いて画面に指を触れ直す（音楽モヒドイ。アブストラクトナンテイウ、聞イタ事モナイジャンルシカナイ。飛行機酔イシソウナ暗イ音ト一緒ニ、酒ニ酔ツタヨウナ男同士ガ、罵声ヲ拳ゲテ本気デ罵リ合イ、ドノ曲ニモ延々ト喚カレテイ。イッタイ何ナンダ？ 人ノ話ス言葉ニシテハ汚サ過ギル）。

画面に伸ばしていた腕だけを動かし、螺旋状の筋を胴回りに記されている、蛍光紫色のビール缶を手取る（飲ミ物モオカシナノバカリダ。真ッ赤ナパッケージノ缶ダカラ、テッキリコーラカト思エバ、酸ッパイマスタードノ味ガスル。缶一面ヲ覆ウ不揃ナ粒々ハ、炭酸ライメージシテイルト思イキヤ、芥子種ジャナイカ。本当ニ鳥

肌ノスル飲ミ物ダツタ。コレモ、グレープジュースカト思エバ、魚醬臭イビールダシ……）。

隣に座るパチンコ店員野島が映画鑑賞を終え、口元を弛ませたままイヤホンを外す（ククク、集団暴行シーンガ少ナカッタケド、マア、質ノ高イ暴力シーンモアツタシ、中々楽シメタネ。クライマツクスノ百対一ノ集団暴行シーン、アレナンカ、ミンナ馬鹿ミタイニ一生懸命デ、スゲーオカシカッタネ、ククク）。

一瞬通路側に目を外してから、視線を正面に戻し、田島は視界の脇に野島の顔を捉える（コノ人モ、出発シテカラスツト映画ヲ見テルヨナ……、スデニ五時間八経ツタノニ、ヨクコンナ長ク映画ヲ見テ居ラレルヨナ、ヨホドノ映画好キナノカモシレナイ。イヤ、並ノ映画好キジャ、コンナ酷イ内容ノ映画八見テラレナイ。映画好キ云々デハナク、常識ヲ備エタ人間ナラ、トテモマトモニ見テイラレナイ。ナンダ、口元ガニヤケテイルゾ、面白ク感じテイルンダナ）。

野島は縞模様の添乗員に向かって手を挙げて、金平糖の表面が貼り付いた、不気味な赤い缶を上に掲げる（イカレタ映画ニ、イカレタ飲ミ物、ソレニ陰気な添乗員、シャガン・スクルブノ機内ハレベルノ高イ娯楽施設ダネ）。

田島は後頭部の野島を見つめる（コイツ、マタ飲ムノカ？ コレデ七杯目ダゾ？）

水玉模様の添乗員から飲み物を差し出され、野島は両手で受けとる（バイオレンス映画にエナジードリンク、コレニ勝ル組ミ合ワセ無シ）。

「あの、映画は好きなんですか？」野島が飲み物を受け取るのを待

って、田島は愛想く声をかける（コンナオカシナ男ト話シタクナイガ、マア仕方ガナイ、少シハ話相手グライ務マルダロ）。

「えええ、あつ、はい、もうすごい好きなんですよ」野島は背を丸め、脳天に手を乗せ、出来上がった笑みを浮かべて答える（ナンダコノ溜メ息男、アマリニモ暇デ、ツイニ話シカケテキヤガツタネ。能無シメ、一人遊ビガ出来ナインダネ。モットマシナ質問シロヨ、コレダケ映画ヲ見テイルンダカラ、尋ネナクタツテワカルダロ。好キジャナキヤコンナニ見ルカ、阿呆！ 暇デ死ニソウナ癖ニ、何気取ツテイルンダネ？ 平静ヲ装ウナ）。

「こういうジャンルの映画を、今までほとんど見たことないんですけど、どこが見どころなんですか？」田島も出来上がった微笑みを浮かべて、画面に指を指す（ナンテ卑屈ナ笑イ顔ダロウ、教養ガマツタク見エナイ。下劣ナ男ダ、コンナ嬉シソウニ答エル時点デ、ソモソモ間違ッテイル、醜イ男ダ、話シカケルンジャナカツタナ）。

「見どころですか？ 見どころはたくさんありますよ、えええ、細かい点を挙げればきりがないので、そうですね、まず男の力強さですかね。えええ、ちょっと残酷なシーンが多いんですけど、鍛え上げられた男の体が、どの俳優もたくましいんですよ。えええ、役に向けてしっかり体を仕上げているんです、まずその俳優の肉体美が見所ですね。次に特殊メイクやCG、スタントマンも一切使われてないので、えええ、生の役者の全力の演技がたまりませんね。そのせいか、スクール映画の制作現場は苛烈を極めるらしく、事故が多発するのが当たり前みたいですよ。戦場に行くよりも、えええ、映画の撮影の方が死ぬ確率が高いと言われ、映画関係者はみんな短命ですね。プロサッカー選手の現役期間よりもずっと短いみたいですよ」

しきりに頬をさすりながら、野島が落ち着きなく説明する（馬鹿馬鹿シイ、馬鹿馬鹿シイ、見レバワカルジャナイカ、ナンデワザワザ説明ナンカ要ルンダネ？ 極限マデ磨キ上ゲラレタ圧倒的ナ暴力ニ、情ノ欠片モ漂ワセナイ残酷ナ殺人コソ、スクルブ映画ノ醍醐味ニ決マツテルネ）。

「へえ、そうですか、さつきすこし見ただけですが、それでもすごい内容でしたよ、本当に大変そうですね」田島は腕を組んだまま、小さく数回頷いてから話す（鍛エタ男ノ体ニ、小細工シナイ生身ノ演技ダツテ？ 野蛮ナ観点ダナ）。

「えええ、それはもう、本当に凄い事でした、スクルブ映画の中で人が死ねば、実際に一人の人間も死んでいる事になるんですね。えええ、どっかの国の映画みたいに、ばたばたと人が死なないかわりに、たった一つの死が非常に重いですよね、えええ、本物です、スクリーンが描く世界は虚構ですが、それを組み立てる映像は全て事実です。たった一つの蹴りだつてがつんとききますね」

野島は視線を泳がせ、田島の眼をちらちらと見る（少し見タダケデ、何ワカッタ気ニナツテイルンダネ、ワカルワケナイダロ。ラストマデ見ナイデ、スクルブ映画ノ何ガワカル、コノタワケ者メ、白々シク頷クナ）。

「ああそうなんですか、それはとんでもない事ですね。……すると戦争を題にした映画なんかは、多くの人の命が奪われているんですかね？」田島はわずかにのけ反ってから、顎に手を据えて話す（ソナハズナイダロ。映画ヲ作ル度二人ヲ殺シテイタラ、色々ナ問題ガ起キルダロ。人が足りナクナル事ハナイダロウガ、死ンダ人間ノ家族ガ黙ツテイナイ。コイツ、俺ガ知ラナイカラト思ツテ、適当ナ事ヲ吹キ込ンデ、カラカツテイルンダナ。フザケタ奴ダ）。

「えええ、戦争映画はあまり撮られていないんですが、数作品ありますね。その、人が大勢死ぬというのが、あまり撮られない理由でしてね、えええ、映画自体が大量に作られないスクルブにおいて、戦争映画が希少になるのは仕方がないことですね。えええ、二十五年前に作られた『ヴァー!』、邦題で言うところ『斬つてしまえ!』ですね、スクルブの古い内戦を描いたこの映画は、約五万人が死んだそうです。特に合戦のシーンが圧巻でして、本当の殺し合いを行って撮影されたのです。えええ、多くの人が一般の国民でして、映画が作られることが決まると、国民は競って参加しあつたのですね、えええ、偉大な歴史である内戦を、映画という芸術を通して永遠の物とするべく、まさに国が一丸となつて映画製作に協力したのです。えええ、撮り直しとなると大変ですね。そのかいあつて、まがい物が存在しない、狂気渦巻く唯一の作品として存在することになつたのですね。えええ、見た人間の価値観を簡単に揺り動かしますね。えええ、出来上がった後は、スクルブの経済がやっぱり傾いたみたいですね」

口元を何度かにやけさせながら、野鳥は慌しい鳥のように説明する（コイツ、スクルブノ戦争映画二目ヲツケルナンテ、中々ヤルネ、デモ、人ノ命ガ奪ワレタハ言葉ガ悪イネ。ムシロ、捧ゲラレタト言ウベキダネ）。

「はああ、なんかすごい話ですね、それが本当なら、わたしもちょっと見てみたいですね。この画面の中に入ってますか？」顔を画面に向けて田島が示す（チョット話二乗ツテミレバ、トンダ大嘘ヲ平気デツイテキヤガツテ、マツタク凶タイ奴ダナ。スクルブノ映画自体ホトンド知ラナイガ、映画デ五万人モ死ンダトナルト、歴史的ナ出来事ダゾ。二十五年前トナルト、俺ガ小学生ノ時力、イヤ、ソナ話聞イタコトモナイゾ）。

「えええ、入ってませんね、『ヴァ!』はスクルブ映画の中で、特別に保護指定された映画の一つでして、DVDでもインターネットでも決して見ることはできませんね、えええ、スクルブの首都ガギヤンにある、国立映画館でしか見ることができません。えええ、作品自体が国立映画館の設備に合わせて作られたので、スクリーンが小さく音響設備の拙い他の映画館では、『ヴァ!』の魅力が存分に発揮されないですよ、えええ、テレビやパソコンなんでもつてのほかですね。スクルブという国が許していないですよ、えええ、ですから、実際に見るのなら、上映期間中にスクルブへ足を運んで、チケットを予約して見るしか方法はないですね。えええ、僕の今回のスクルブ旅行は、『ヴァ!』を見ることにあるんですよ、えええ、他にも理由はありますがね」

右手の甲を下顎に擦りつけながら、野島は頭を揺らしながら説明する(ソレガ本当ナラダト? 多少誇張シタ所モアルガネ、本当ニ決マツテイルネ。死者八實際八三万人デ、国民ノホトンドガ進ンデ参加シタヨリモ、ムシロ参加ヲ拒ンダ国民ヲ多ク徴兵シタゲライカネ、アト八本当ノ事ダカラネ。コノヤロウ、何が画面ニ入ツテイマセンカダネ? 嘗メルノモイイ加減ニスルンダネ、僕ガドレダケ苦勞シテ、スクルブ旅行ノ準備ヲ整エタカ、オマエハ知ラナイダロウ?)。

「ああ、そうなんです、現地に足を運ばないと見られないんですね。それはすごい保護の仕方です、動画が氾濫する日本では考えられないですよ。ああ、そうですね、あなたは観光目的でスクルブに行くんですね?」右手で太腿を軽く叩き、田島が笑いながら話す(ソウカ国立映画館力、日本ヲ出発スル前ニ、同僚ガソナ様ナ事ヲ口ニシテイタナ、テッキリポルノ映画ヲ上映シテイルノカト思ツタガ、話ガ全然違ウジャナイカ、アイツメ。マア、コイツノ話ガ法螺

カモ知レナイカラ、マダワカラナイナ。シカシ、見夕目ト通り中身モ胡散臭イガ、中々信憑性ノアル話ダゾ。

「えええ、観光ですね、七泊八日の短い観光ですね、バイトの休みの合間を使つての観光ですね、えええ、二年前からスクールブに行くのが楽しみだったんですよ、スクールブ映画は現地の映画館とシヤガン・スクールブの機内で見れないですからね、えええ、日本国内じゃどんなに金を出しても見れないですからね、えええ、今は最高ですね、えええ、好きだけスクールブ映画が見れるんですから、えええ、それも機内で見れる映画もやはり機内で見ると目的に作られているので、地上の映画館では見ることが出来ないですよ、えええ、今の時期は、長いスクールブ映画の歴史の中でも図抜けて評価の高い三作品、『ヴァー!』と『ジユガ』、『ヒユヒ』が、ええ邦題で言いますと、『斬つてしまえ!』と『肉の侵攻』、『賄賂』が同時に上映される、十年に一度の時期でしてね、スクールブ映画ファンが沸騰して騒ぎ立つ特別な期間でして、えええ、あなたも観光ですかね?」

うつすら生え残った顎ひげを擦りながら、野島が声を大きくして話す(観光ノワケナイネ、スクールブ映画ヲマツタク知ラナイ無知ガ、スクールブへ観光シニ行クワケナイネ)。

「へえそうですね、それは良かったですね。わたしなんか仕事ですよ、一週間前に突然会社から命令が下されて、準備の整わない間に飛行機ですよ。なんでも湿地帯から莫大な量の稀少金属が見つかったらしく、採取する為の設備の、建設権利を巡って駆りだされたんですよ」

田島は含み笑いをして、一呼吸置いてから話す(映画ノ何ガスコイノカヨクワカラナイガ、随分気楽ナ奴ダ。見タイ映画ヲ観ルダケ

ダモンナ、ソレナラ、楽シイ気分デ飛行機ニモ乗レルハズダ。俺ナ
ンカ、見モ聞キモシタコトノナイ、ワケノワカラナイ遠方ノ国ニ飛
バサレルンダモンナ。要スルニ左遷ダヨ、イクラ他ノ人間ニ任セラ
レナイ重要ナ仕事トハイエ、ヤツパリ都合ノ良イ左遷ダヨナ。

「えええ？ 転勤ですか？ ということはスクールブに住みながら働
くんですかね？ えええ？ 費用は会社持ちですかね？」野島は眼
と鼻の穴を広げて尋ねる（コイツ、涼シイ顔シテ、随分ト嘗メタ自
慢ヲスルネ。スクールブニ転勤ダト？ 物価ノ高イスクールブニ訪レル
為ニ、玉ツコ口屋ノ嫌ナルバイトヲ、必死デ耐エテキタノニ……、
今ノ期間ハ、映画目的ニ訪レル観光客ガ多クテ、タダデサ工高イ航
空券ヤ宿代ガ、何倍モ値上がりシテイルノニネ、コイツトキタラ、
何ノ準備モセズニ、会社ノ金デ突然スクールブニヤラレタナドト、フ
ザケタ事ヲ言ウネ、ナント羨マシイ。何年モカケテ準備シテキタ僕
ヲ、嘲笑ツテイルンダネ、ソウダネ）。

「もちろんですよ、どのぐらいの期間になるか、はつきり決まっ
ていませんが、最低でも五年間は住むことになるでしょうね。会社が
費用を持ってくれないければ、とてもじゃないが行きませんよ」田島
は苦笑いして答える（コイツ、ナンテ気味悪い顔ヲスルンダ、アア、
羨マシイト思ツタンダナ？ ソレニシテモ五年カ、五年ハ長イヨナ、
五年経ツタラ俺モ四十ヲ越エテイルヨ。会社デノ地位モ固マツテ、
貯金モ随分ト貯マツタカラ、来年ニハ結婚シヨウト思ツタ矢先ダヨ。
デモ、今ノ歳デ会社ヲ辞メラレナイシ、仕方ガナイヨナ。スクールブ
人ガドンナ姿形ダカ知ラナイガ、外国人ト結婚ハ嫌ダナ、セイセイ
生活ノ慰メ程度ノ関係マデダロウ、老後マデ続クヨウナ関係ハ持ち
タクナイ。マサカ、映画ニ出テイタ継ギ接ギ人間達ガ、スクールブ人
ジヤナイヨナ）。

「えええ、羨ましいですね、最低五年間はスクールブ映画を満喫でき

る権利をもらえるんですね、えええ、夢に見るほど羨ましいですね、えええ、どんな会社に勤めているんですか？ 僕もその会社に入つて、スクールで働く事できないですかね？ えええ、アルバイトでも良いので、時給も安くて構わないので、なんとか働く事できないですかね？」

田島の手をしっかりと握つて野島が懇願する（コノヤロウ、会社ガ金出サナキヤ、トテモ行ク気ガシナイダト？ ワザトダネ、コイツ、ワザト言ツタンダネ、僕ガ短イ旅行者ダト知ツテ、宝クジノ券ヲチラツカセタネ、アア、ムカツク、ナンテ意地汚イ奴ダネ、コンナ奴、スクールニ行ク価値ナイネ、殺シテ変ワツテアゲタイネ。スクールブ映画モ知ラズニ行クナンテ、アアムカツクネ）。

「わたしは大手の商社に勤務しているんですよ、そうですね、あなたのような人なら、スクールでの勤務に適していますよね。アルバイトか、どうでしょうね、あればいいんですけど、ちょっとわかりませんね」田島は愉快そうに笑いながら話す（コイツ馬鹿ダナ、内ノ会社ガ、コンナ小汚イ学歴モ能力モ無サソウナ奴、雇ウハズガナイダロ？ アルバイトダツテ無理ダ、コンナ奴働カセテイタラ、企業イメージガ少シデモ傷ツイテシマウ。ハハハ、身ノ程ヲワキマエロヨナ、シカシ、俺ノ代ワリニ、コイツガスクールブデ働ケバナ、俺ハ快適ナ日本デ暮ラセルノニ）。

「えええ、そうですね、わからないですよ、ちょっと急な事を言っただけです、すみません、えええ、そっか」野島はひどく頭を垂れて小さく声で話す（ナニガ、アナタノヨウナ人ナラダネ、ソウ思ツタナラ、トットト日本ニ帰ツテ、玉ツコ口屋ノアルバイトヲ引キ継ゲ。代ワリニ僕ガ権利ヲ手ニ入レテ、映画ヲタクサン見テヤルカラ、安心シテマイクパフォーマンズスルダネ。ソレトモ、エエエ、大学ニ入り直シテ、新卒デ入社デモスルカ？）

「随分とスクルブについてお知りの方ですが、あの、スクルブっていったいどんな国なんですかね？」変に真面目な顔して田島が問いかける（ハハハ、コイツ、落ち込シダナ。マツタク変ナ奴ダ、スクルブニ住ミタイト思ウナンテ。……デモ、スクルブツテドンナ国ナンダ？）

「えええ、スクルブという国は、映画芸術の最高の要素として、暴力を徹底……」

野島は眼光するどく田島を睨む（エエエ、ホントニ殺シテ……）。

最後部座席（前書き）

長距離バスはケルンへ向かう。車内の最後部座席では……。

最後部座席

ダミリンは女、シペプは男、二人は薄汚れたコンクリートに尻をつけて、互いに向き合って口づけを交わしていた。バスステーション内には陽が射し込まず、酸素は薄く、排気ガスの臭いが充満している。出発のバスを待つ人々には、荷物を足元に置いて静かに待つもいれば、小さな子供を相手に笑うもいる。不満げに周りに目を向けるもいれば、肌の色の違う三人が淡々と話すのもある。

チュツと、小さく息を吸い込んで唇の吸いつく音が聞こえる。切れのある乾いた音でありながら、どこか水気を含んで粘り気がある。立ちながらバスを待つ人々の中、ダミリンとシペプだけが座り込んでいた。

ダミリンが両手でシペプの頬を押さえて、巻き込むように口づけをする。シペプは慣れた様に口づけを吸い込み、ダミリンの背中を滑るようやたらにさする。

長い口づけが一休みすると、顔を寄せて頬の肉を静かにすり合わせた。二人の腕は互いの背中にまわり、接地面をすこしでも逃さぬように手の平を広げて、虫のような動きをする。ちよつとでも右の頬に飽きると、我慢することなく左の頬に変え、背中を触る腕は腰のあたりや腋の下に移動することもあった。

頬のなすりつけ合いが終わると、次は額のぶつけ合いをした。疑うことのない甘い笑みを浮かべて、白眼に浮かぶ血管の一本一本を数えるよう互いの眼を見つめ合う。シペプは力を抜いてダミリンの頭を抱え、ダミリンは首の力を抜いて瞳に意識を集中させる。手は

シペプの太腿あたりを這いずりまわっている。

ようやく人々の待つバスが到着した。慌しく群がり始めた人々に気がつき、二人は十度口づけを交わしてから、それぞれ重い荷物を手に取る。空いた方の手で互いの尻のあたりに手をまわす。ダミリンは脛を大袈裟に動かしてから、シペプの口に四度口づけして、重い荷物を手渡す。シペプが三度口づけすると、ダミリンは大型バスの乗車口に移動して扇型の列に加わった。シペプは重そうに体を動かして、バスの横腹に移動した。

シペプがバスに乗り込むと、ダミリンは最後部座席の窓側に陣取っていた。シペプは五秒間の口づけを一度と、小刻みを四度、唇に吸いつくのを一度して、席に座った。最後部の座席は五人席、ダミリンから数えて、シペプ、長身長髪眼鏡の男、若白髪青年、頭の禿げた肥えた男が座っている。

一人は小さなカメラを手に携えて窓の外に目を向け、一人は目の前の座席に目を据えたままじっと動かず、一人は顎を手で支えてうなだれている。一人は一人の頭をつかんで、錠の下りない鍵を回すように、やたらに口づけをしている。一人は一人のわき腹あたりに両手をあてて、腋の下の間をさすりながら唾液を交換している。

バスが出発するまでに三十分かかった。その間にダミリンとシペプの口づけした回数は、大中小合わせて、計百四十六回、その内一番長いのは七分三十二秒間続いた。

満席のバスの車内は人々の会話でほどよく埋められていた。ダミリンとシペプは互いの側面を密着させ、腕を絡ませて会話しつつ、箸休めのごとく口づけする。最後部から二列目の席は肌の黒い人達に占められ、フライドポテトを食べながら陽気に会話している。後

る三人の男は一言も口を利かず、笑いの耐えない話し声と耳にへばりつく口づけの音を耳に、固まったそれぞれの表情を浮かべている。

一時間もするとダミリンは小型のノートパソコンを開いて、なにやら画像ファイルを整理し始めた。シペプは小さな文庫本を開いて文字に集中した。それでも水面顔出すハイギョさながら、三分に一度は長い口づけを交わす。男三人は体制をほとんど崩さず、小さな座席の上に変わらず収まっている。肌の黒い人達の会話の勢いもまるで変わらない。

三十分もすると、ダミリンの腋の下にはシペプの顔面がうずくまった。背中より胸に近い肉の盛りあがり、呼吸のしづらさを構うことなく、赤子のように無遠慮に押しつけている。腕はややたるんだ腹と腰を回っている。ダミリンは嫌な顔一つせずにパソコン作業を続ける。真ん中の席に座る長髪の男は、すこし前から眉間に皺を寄せたままの顔でいる。

三十分も過ぎない内にシペプは目を覚まし、目覚めの長い口づけを交わす。ちょうどダミリンのパソコン作業も終了したので、二人は狭い座席内で体を向き合わせた。シペプが上半身をひねり、ダミリンは靴を脱いで、シペプの太腿の上に細くも太くもない脚を乗せる。それから糸蚯蚓のようにならねらせて絡み合い、熱のこもったしつこい口づけをした。長髪の男は横をちらちら気にするようになり、まるで関心を寄せていなかった若白髪の青年も、表情変えずに何度か二人の姿を確認し、肥えた禿げ頭の男も興味深そうに二人を見る。肌の黒い人達はまるで変わらない会話を続けている。そんな状態が約一時間続いた。

シペプの太腿の上に今度はダミリンの頭が乗った。膝を曲げて体は卵型になり、狭い座席で、寝心地悪そうに横になる。シペプは左

手に本を開き、空いている右手はダミリンの柔らかい横腹を這う。ちらちら視線を注いでいた長髪眼鏡の男も、痛めそうなほど首を下に曲げてどうにか寝入っている。若白髪の男は変わらず、やけに眼をぎらつかせて前を見たままだ。肥えた男は窓に禿げた頭を持たせて、気持ち良さそうに眠っている。肌の黒い人達はビールを飲みだしていた。

ふとすると、若白髪の耳に聴きなれない調子の声が聞こえた。横を見ると、シペプが本を朗読し、ダミリンが甘えた表情で見上げている。

三十分もすると外は暗くなり始め、街灯が目立つようになった。暗闇の深くなるにつれて、車内の会話は少なくなり、ダミリンとシペプの絡み方もねちっこくなる。目を覚ました長身長髪の男も、苛立ちを投げるよう二人の姿に目をとばす。

互いの唾液を循環させて、二人は手と口だけに神経を集中させていた。一分間に行う口づけの回数も、長さも、密度も、太陽が顔を出していた時に比べて格段に深みを増していた。チュツの音も、愛らしさよりも汁っぱさが目立つ。

バスはブリュッセルに到着した。多くの乗客が安堵の息を漏らし、狭苦しい空間に立ち上がり、地を歩く心地好さ欲しさに素早く降車する。肌の黒い人達が降り、長身長髪眼鏡の男が降り、肥えた禿げ頭が降り、満席だった車内にはわずか十人ばかりの人が残った。

様相変えたバスは出発した。若白髪の男は窓側に移り、ヘッドフォンをつけて外の景色だけを眺めた。最後部座席反対側では、広々とした空間と、線と色をばかす闇にまぎれるダミリンとシペプが、澁刺と淫気を漂わせて絡み合っている。腫れあがる口づけの音は湧

きあがる性のたぎり、這いずる手の動きは肉の同化を表している。

窓ガラスに融けるように抱き合い、蛙の鳴くように愛撫の音を立てるも、しばらくすると普通の乗客のように横に並んで座る。狭く柔らかい座席に横になり、窮屈な空間をもとせせずに密着して、蛆虫が這うよう重なった体を奇妙に伸縮させるも、やはりある程度すると、何事もなかったごとく横に並んできちんと座る。シペプが胡坐をかき、その上にダミリンが座り、背を胸にもたせて、首を曲げてねじれるように口づけし、首の付け根に指をかけ、頭に手を回して髪の毛をなでて、物欲しそうに頬をさすり、腹から胸にかけて肉の弾力を押し上げたり、混ぜ返したり、足の付け根をなぞり、太腿を引つ張って、今にも股間に手が伸びそうになるも、それ以上進展することなく普通の乗客の姿勢へと体勢を戻す。

ブリュッセルを出発して約二時間、若白髪青年は外を眺める以外に、たったの一度も二人へ眼を動かさなかった。だが、ふと視界の脇の怪しいシルエットに驚いて、思わず目を向けた。一人が座席にもたれかかり、もう一人がその上に馬乗りになっている。乗っているほうの黒い輪郭が、やたらゆっくりと、滑らかに腰を動かしている。窓の外には燈色が遠く、ぼつぼつと火に見える。

若白髪は大変驚き、盗むように二人を確認した。シルエットは腰を動かしながら、座席に持たれかかっている上半身と重なった。馬乗りしているのが相手の首に両手を回している。頭から垂れる柔らかい線が見えるから、こっちが女だ、女が腰を動かしている。若白髪青年は声を確認しようと、ヘッドフォンをさりげなくずらした。服の擦れる音と、湿った吸盤を思わせる聞き飽きた口づけの音、それから二人の笑い声？ 喘ぎ声ではなく、笑い声だ。

それから三十分もすると、やはり二人は、どこにでもいる乗客の

ようにちよこんと最後部座席に座り直した。勢いの衰えない口づけと、冷えた肌をさすり合うのを緩めることなく、長いバスの移動に疲れを見せずに笑い合う。

間もなくバスはケルンに到着した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5205p/>

小品集 1

2010年12月16日01時56分発行